
魔法少女リリカルなのはOOO/StrikerS

ブルちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはOOO/Strikers

【Nコード】

N8117U

【作者名】

ブルちゃん

【あらすじ】

無欲な旅人 エイジと腕だけの異形 アンクが魔法少女と出会う
とき『欲望』^{メタル}を巡る戦いが始まる！！

〇〇〇へオース (前書き)

後先考えずの投稿です。まだ、もうひとつの小説あまり進んでないのに (汗)

とりあえず駄文ですががんばりますのでよろしくお願いします

〇〇〇《オース》

『欲望』

それは多くのものを世に齎した源。

それは何かの始まりとなり

それは何かに終わりを齎した

それは何かの力となり

それは何かに滅びを齎した

人の世が続く限り恐らく尽きることのない無限とも呼べるような力

これは『物語』

人の身に余るそのチカラで闘う戦士の物語

奇妙な『利害』^{きずな}で結ばれた異形と旅人

そんな二人と出会った『魔導師』たちとの物語

それは、渦巻く炎の中で

「エイジ、助かりたいならヤツを倒すしかない」

腕だけの異形が囁く。

「乗せられるなソイツに！使えばタダでは済まない！」

虫のような異形が警告する。

「おい！多少のリスクが何だ！ココで三人とも死ぬよりマシだろう・
・エイジ、早くやれ・・『変身』しろ！」

腕の異形は急かす。

「よせ！……」

虫の異形は止めようとする。

少年は戸惑いながら後ろを振り向くそこには、怯えた目で座り込む蒼い髪の少女。

それを見た少年は少女にフツと笑いかけた。そして

「彼方此方行つたけど、楽しんで助かる命はないのはどこも同じだな」

そう言つて『メダル』をベルトにセットする。

「……どうして？」

少女は問いかける。

「君が手を伸ばしたから」

「え？」

ベルトのバックルが斜めに傾く。

「『助けて!』つて手を伸ばした」

腰のスキャナーを手に取り構え

「……手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する……
・それはイヤだから手を伸ばした。ただ、それだけ」

スキャナーでバックルのメダルをスキャンする

キーン！キーン！！キイイイインツ！！！！

「変身！」

スキャンし終わった瞬間、少年の周囲を赤・黄・緑のメダル状の光が回転するように出現し

<タカ!><トラ!><バツタ!>

<TA・TO・BA!TATOB A!TA・TO・BA!
!>

奇妙な歌と共に光が少年を包んだ。そして、光が収まったとき、少年は『変わって』いた。

身長は伸び、黒いボディと胸部のサークルに刻まれている『赤い鷹』
『黄色の虎』 『緑の飛蝗』 足は緑の脚甲、腕は黄色の鉤爪、顔は黒のフルフェイスに赤い鷹を模したマスク、そして額にガーネット色に輝く菱形のクリスタル。そう、少年は異形の戦士へと『変身』していた。

「!?!?何!?!?今の変な歌??. . .それにアレはなんなの?バリアジャケット?」

少女は驚愕し疑問を口にする。

すると、すぐ近くに腕の異形が近づき

「歌は気にするな。 . . .そしてアレは〇〇〇《オーズ》だ
!」

「オー . . .ズ?」

こうして『物語』は始まった。

いくつもの『欲望』が折り重なり綴られる物語。

この世界の『欲望』がどれだけの『欲望^{メダル}』を生み出すのか。

その先にあるのは・・・破滅か・・・救済か・・・。

それは、まだ誰にも分からない・・・・・・・・・・

第1話 雷と鉄槌とパンツの男（前書き）

駄文ですが楽しんでもらえると思います。

第1話 雷と鉄槌とパンツの男

深夜

ミッドチルダに在る、とある美術館

美術品保管庫

そこでは、今、犯罪が行われていた。

保管庫にコッソリと忍び込むように入ってくる二人の男。
この二人は、窃盗目的で警備員をしていたコソ泥である。

「……………は……………あはははは！宝の山だ！俺たちの……………おい！
とつと運び出そうぜ」

「シート！大きな声出すなよ。警備システム切ってるからって大声
出したら気づかれるぞ……………ほら、今日入ったバイトの……………」

「大丈夫だ！薬でグッスリだ」

所変わって……………警備室では、

グー
グー

典型的なイビキを欠いて熟睡する青年がいた。

再び舞台を戻すとコソ泥の二人は美術品を品定めしながら運び出そ

うとしていた。

「もっと丁寧に扱えよ」「大丈夫だって・・・ん？おい！コレって、あれじゃないか？ほら！古代ベルカの・・・」

そんな会話が続く中、

・・・チャリーン・・・チャリーン・・・

美術品の中から何かが零れ落ちた。

「はははは！俺たちのだ！コレも！コレも！・・・ん？」

「おい、どうした？早く運べよ」

「・・・何だコレ？」

男は『ソレ』に気づき、拾った。

「・・・メダル？・・・昔の通貨か？」

男が拾ったのは銀色の『メダル』だった。それは、虫の絵の刻まれたメダルが二枚。

「おい！・・・なにやってんだよ。早くしないと・・・なんだよソレ？」

「いや、今拾って・・・」

男がそこまで言いかけたとき、異変は起こった。

「!?!?.. な、なんだ!?!?」

「!?!?」

男の手にしていたメダルがひとりでに動き出していた。

男は気味が悪くなり投げ捨てようとしたが、その前に男たちに異変が起きた。

二人の額に銀色のコインスロットが現れ、手にしていたメダルはそこに飛び込んだ。
すると、

ヨクボウヲカイホウシロ

二人の頭にそんな声が響いた瞬間、

ズツ!ズズルウウウウー!!

そんな音を立てて、コソ泥たちの身体からミイラのように体中にバンドのようなものを巻きつけたミイラのような人型の異形が二体這いずり出てきた。

「ヴヴウウウアア」

異形は呻き声を上げると、周りの美術品を食べ始めた。そのとき、安心していたコソ泥たちは正気を取り戻しそれに気がつく。そして、

「な!おい!やめろ、それは俺のだ!」

「くそ!化け物なんか邪魔されてたまるか!」

普通ならばこんな怪物によく分からないのに突っかかるなど愚かの極みだが、欲に飲まれて考えが足りてない二人は、異形に殴りかかった。・・・が、腕の一振りですべて飛ばされ、気を失った。そして異形たちは、そのまま『食事』を続け、あらかた食い尽くした後、

「タリナイ・・・モット・・・モットオオオオオ！！！！」

雄叫びと共に身体を変化させ、暴れだした。

そして、大きな音と共に美術館は破壊され、時空管理局が到着する頃には異形の姿はどこにもなかった。

そして、

ぐううううー・・・ぐー・・・

。。。。
奇跡的に崩壊を免れた警備室で青年はいまだに熟睡していた。。。。

- - - - -

早朝、瓦礫の山となった美術館には管理局員達が調査のため動き回り、レスキュー隊などが瓦礫の撤去などを行っていた。そこへ、

「ご苦労様です」

「ん？」

歩いてきた女性が現場指揮官らしき男性に話しかけ、指揮官は振り向くと

「……………」

そこには、局員の制服を着た金髪を腰の辺りまで伸ばした美女が立っていた。指揮官は、しばらく見惚れていたが、

「あの……現場指揮官ですよね？」

「……ハッ！……申し訳ない。……オッホン、そうですが。えーと、あなたは？」

ようやく正気に戻った指揮官は、誤魔化すような勢いで尋ねた。

「はい。機動六課 執務官 フェイト・T・ハラオウンテスタロッサです。この

んて思つてフェイト呼んで・・・こんだけやって結局ハズレかよ」

声の主は落胆するように溜息をつく。すると、フェイトは苦笑しながら

「まあ、確かに『レリック』じゃなかったけど・・・でも、まったく無関係かは分からないかもしれぬよ、ヴィータ」

そう言つて、声の主に振り返る。そこには、局員の制服を着た、10歳くらいの勝気そうな目をした赤毛の少女が腕を組んで立っていた。

「ん？どうゆうことだよ」

「うん、エネルギー反応のデータ見てて思ったんだけど・・・レリックに酷似してるデータが幾つもあるんだよ。」

「偶然じゃねーか？」

「普通なら私もそう思つただけだね。でも、いくらなんでも酷似データが八割以上だとさすがにおかしいよ」

「八割！？ほとんどじゃねーか！」

「だから同じ次元世界のロストログアって可能性もあるし、もしかしたら誰かが作った複製品が美術品に混ざつてたかもしれないんだけど。まあ、これ以上のことはココじゃ調べられないから六課に戻つてシャーリーにデータを調査してもらわないと」

そう話しながらフェイトとヴィータは撤去作業の邪魔にならないよ

う特に破損の無い建物の方へ移動した。

．．．．．そう、警備室のある建物へ．．．．．

- - - - -

ほんの少しだけ時間を戻し、電気が消えて擦りガラスとブラインドからの弱い光で薄暗くなつた警備室。

「ぐー．．ぐ．．む．んん？．．あ．れ？」

そこで寝ていた警備服を着ていた青年が目を覚ました。

「．．．．いつの間に寝てたんだ？．．えーと．．あ．こんな時間が．．おつかれさまでした．．んー！」

まだ寝ぼけた様子の青年は、大きく伸びをする。

青年の容姿は客観的に見ればイケメンと評価されるような容姿なのだが、寝ぼけた様子と髪寝癖でそれを相殺していた。

「さて、着替えてバイト代受け取らないとな。そろそろ『アイツ』も戻る頃だろうし．．ふあゝゝあ」

欠伸しながら立ち上がると、ポイポイツといった感じで制服を脱ぎパンツ一丁になると制服を拾い上げ、壁のハンガーに制服を吊るした。

・・・強いて言うなら、奇跡的にタイミングが悪かったということなのだろう・・・

.....

再び場面はフェイト達が『まだ』無傷だった警備室の在るあたりの壁に差し掛かったときに戻る。

二人が歩いているとき何の前触れもなく、唐突に、フェイトが躓いた。

「わわ!!」

バランスを崩したフェイトは倒れそうになり、咄嗟に近くの壁に手をつけて転倒を防ぐ。すると、

ギィ・・・ギギギィィィィィィ

「え?」

聞こえた音をフェイトが疑問に思う。

.....

青年が制服を壁のハンガーに掛けた瞬間、

ギイ・ギイ・ギイ・ギイ・ギイ

「え？」

聞こえてきた音に首を傾げる

.....

ピシッ！ギギギイイイイイ・・・ベキッ！ガラガラガラガ
ラ！！！

そんな音を立てて警備室の壁が崩れた。

「ええええええー！！！！！！？」

外のフェイト、中の青年は同時に驚きの声を上げた。

フェイトは目を見開いて崩れた壁を見た。崩れたのは、フェイトが
手をついた場所から2mほど先の壁だった。

（さつき、中から人の声がした。中に誰が残ってた？・無事かど
うか確認しないと！）

そう思い、急いで崩れた壁の穴を覗き込んだ。そこには、

パンツ一丁の男が大口を開けて立っていた。

(・・・エート・・・怪我とかはなさそうだね。(パンツ)・
たぶん犯人とかじゃないよね・・・(オトコノヒト)・エエ
ト・・・(ハダカ)・・・)

目の前の状況処理できず混乱し思考がフリーズするフェイト。
同じように状況が分からない青年。
そして、二人の目が合った。

「・・・・・・・・・・」

少しの間お互いに沈黙していたが、やがて

「・・・おはようございます?」

青年がそんな挨拶(?)をすると、

「・・・・・・・・?!?・・・・・・・・!!!?!?」

思考を取り戻したフェイトは目の前の男の裸を見て顔を一気に真っ赤にし

「キ・・・キヤアアアアアアアアアア//!!?!?」

スパアアアアアアアアアア!!!!

「へぶううううー!?!」

悲鳴と共にフェイト渾身のビンタ（+電撃）が炸裂し、青年は派手に吹っ飛ばされた。

そしてすぐに自分のした事に気づき、オロオロし始め、最終的に

「うううう!?!? ヴィータ!?! どどどど… どうしよう!?!?」

涙目で同僚に助けを求めた。

助けを求められたヴィータは、半目で呆れたように

「はあー… なにやってんだよ。まったく」

溜息をつきながらとりあえず吹っ飛ばされた男の救助をする為に行動を始めた。

第1話 雷と鉄槌とパンツの男

第1話 雷と鉄槌とパンツの男（後書き）

次回は戦闘開始予定です。

第2話 旅人と赤い腕の男と仮面の戦士（前書き）

遅くなりました。とゆうわけで第二話です。

あいかわらず駄文ですが、楽しんでもらえるとうれしいです。

第2話 旅人と赤い腕の男と仮面の戦士

・
・
前回の魔法少女リリカルなのはOOO/Strikersは・

一つ メダルの力でコソ泥の身体から怪物が生まれ、美術館を破壊した！

二つ 事件となった現場に機動六課のフェイトとヴィータが到着した！！

そして、三つ 不幸な偶然の出会いをしまったパンツの男とフェイト。混乱したフェイトの渾身のピンタが男に炸裂し男は盛大に宙を舞った！！

取り調べというものは、基本的に緊張を伴うものである。よほどそうゆう状況に慣れているか、度胸がすわっているか、ただふてぶてしいとかでない限り緊張するのが当たり前である。

ましてや、取り調べるのが国家権力的な大組織の人間だとなおさらである。当然、取り調べる側も厳格な様子で話す為、別に悪い事を

していなくてもプレッシャーがかかるものである。

だが何事にも例外とゆうものは存在するものである。

・・・このように・・・

崩れた建物から少し離れた場所で、二人の局員と一人の男（パンツ一丁だったので着替えながら）の取り調べが行われていた。

ただ、局員の制服を着た少女ヴィータは、腕を組みながら呆れた様子であとの二人を見ており。

もう一人の金髪ロングヘアの女性は、顔を俯かせて申し訳無さそうな様子。

そして、取り調べられる側の青年は、特に気にせず着替えている。

ただし、顔の左頬に大きなモミジ模様の跡と髪が少々ちりちりになっているが。

とにかく、どうにもおかしな空気の中、ヴィータが

「はあ・・・とりあえず、聞きたい事あるから答えてくれ・・・えーと・・・名前は・・・」

「火野・・・火野 映司です」

青年は、ヴィータにそう名乗った。

「・・・は？寝てた？」

話を聞いていたヴィータは、目を丸くして聞き返した。

「はい。ついさっきまで」

ヴィータは周りを見回して

「周りこんな事になってたのにかよ。ありえねーだろ」

当たり前とも言えるヴィータの感想に映司は

「いや、本当なんですって！仕事してたら急に・・・こう・・・ガクッ！って・・・というか、これ、ガス爆発かなんかですか？」

「今、調べてる所だよ。てかどんだけ爆睡してたんだよ・・・まあ要するになんにも見てないし、聞いてないって事か」

「えっと・・・はい、スミマセン」

呆れと手掛かりのないことに肩を落とすヴィータ、それに申し訳なさそうにする英司。

「いや謝るような事じゃないけどさ・・・ん？どうしたんだ？」

心配そうにする映司の視線の先には二人の男が担架で搬送されているところだった。

「……だいじょうぶかな？……あの！この仕事の先輩なんですよ。顔恐いけど、いい人達なんですよ！ジューズ奢ってくれたし！」

本当に心配そうな様子の映司は、二人がいい人だということを力説する。そこに、

「えっと……あの二人なら怪我はしてるけど命に別状ないっていつてたよ。少し入院すると思うけど。」

ようやく立ち直ったフェイトが答えた。すると、映司はフェイトを見て

「本当ですか！……よかつた〜！」

安心して本当に嬉しそうにする映司を見て、フェイトは少し笑いながら尋ねる。

「友達？付き合い長いの？」

「昨夜からです」

「え？」

サラッとなんでもないと英司は答え、フェイトとヴィータは目を丸くする。気になって質問すると、

先程聞いた映司の仕事の開始時間と寝てしまう前に見た時刻、そしてそのまま朝まで寝ていたことを考えると、付き合いとしては二〜三時間程度。しかも、まともな会話はジューズを奢ったときだけだと映司は答える。先程の映司の様子からすると短すぎる印象を受け

る。

そんな答えに驚いている二人をよそに映司は、崩れた穴から警備室に入り口ツカーから自分の荷物を取り出ししていた。呆氣にとられていたフェイトは、気を取り直して

「……えつと、火野君。一応、聞きたいことはここまでだけど、また何か聞く事があるかもしれないから連絡先とか教えてくれないかな？」

そうフェイトが尋ねると、

「……連絡先か。そういえば今日の宿も決めてないし……どうしようかな」

と、そんな言葉が返ってきた。

「宿って……もしかして旅行中とか？通信端末でいいんだけど……」

「へ？……あ、いや、違うんですよ。俺、あちこち移動しながら生活してるんで住所とか特定の連絡先とかってないんですよ。ミッドに居ない時もあるし……」

それを聞いたフェイトとヴィータは顔を見合わせる。そしてフェイトが映司に近づきながら、

「……あの、悪いんだけどちょっと持ち物だけ見せてもらっていいかな？」

「え？いいですけど……はい、どうぞ」

そう言つて映司は、ポケットに入っていた物をフェイトに渡す。それは、折りたたまれた妙に派手な柄の布のようなものだった。フェイトがそれを開くと中に通貨が少しあるだけだった。

「え？・・・これだけ？手荷物は？」

「ないです」

目を丸くして尋ねるフェイトに、そう答える映司。ヴィータもフェイトから布を受け取り確認して

「んなはずねーだろ。移動して暮らしてんのにコレだけなんてことがあるかよ」

すると映司は

「イヤ！いけますって！・・・ちよつとのお金と『明日のパンツ』さえあれば！」

「・・・パンツって・・・！？まさか！」

映司は自信満々で答え、それを聞いたときヴィータは手にしていた布を開いてみた。

するとそれは・・・・・・焦げて穴の開いたパンツ（トランクス）だった。

ヴィータは一瞬 思考停止したが、すぐに復帰し

「バ・・・バカヤロー！！変なもん渡さ「ああー！？」・・・！？っなんだよ！？」

そう叫ぶと、シヨウケースの割り中の宝石をかきこむように食べ始めた。それを見た店長は卒倒したが、そんなことはお構いなく宝石を食べ続ける怪人。

やがて、店の宝石をあらかた食べ尽くした怪人に変化が起きた。身体から黒い霧のようなものが発生し、それが全身にまわるころには怪人のミイラ姿は変貌を遂げ、黄緑の蠍螂を人型にしたような姿になっていた。そして、変化した蠍螂男は

「……まだだ……もつと『欲望』を……『欲望』^{メタル}を満たさねば……」

そう呟くと、軽く屈みこみ凄まじい勢いで跳躍し、店の窓を壊して外に飛び出した。そしてそのまま外を走っていた黒い車のボンネットに着地し、ボンネットをへこましながら再び跳躍、それを繰り返しながら跳ね回るように移動して行った。それに遅れるようにして店からけたたましい警報が鳴り響いた。

少し、時間を戻して調査に区切りをつけたフェイトとヴィータは現場を離れ、六課隊舎に戻るためフェイトの車で移動していた。

「結局、手掛かりほとんどナシ……か」

そう言って肩を落とすヴィータに

「しかたないよ、そんなときもあるって。それにそういう調査の積み重ねが結果を生むんだし」

そう言つてフェイトは苦笑する。

「でもよー、色々調べて見つかったのが変なパンツ男って・・・コレ結果につながるのか？」

「・・・うゝ・・・思い出させないでよ。・・・まあ、変わった人だつたけど・・・でもいい人だと思うよ？」

少し顔を赤くしてヴィータに文句を言うフェイト。

「・・・まあ、アレが『悪人』だつてんなら世の中悪人だらけかもしんねーけど」「ガシヤアアアアアン!!」・・・!!?・・・「ドゴン!」・・・つつ!!?・・・なん・・・!!?・・・なんだこいつ!!?」

ガラスが砕ける音、重い何かが車に衝撃を与えたこと、ここまでは何とか認識できた。だが、衝撃を与えた『何か』を見たとき二人は驚愕する。明らかに普通ではない、強いて言うなら『螻蛄男』そう表現するのがぴったりの異形が車のフロントガラスに張り付いていた。

「!?!?・・・つく!?!?」

視界が塞がれ慌てたフェイトは、咄嗟にハンドルを切り、ブレーキをかける。だが、それより早く螻蛄男は跳躍し、走る車を足場にして飛び跳ねていった。

「・・・・・・な・・・なんだ・・・いまの・・・」

「・・・はあああゝ、危なかった・・・分からないけど・・・『アレ』追わないと被害が広がりそうだね。・・・飛行許可申請する

から追うよ！ウィータ！」

「おう！」

二人は、車を移動しながら追跡準備を始めた……。

そのころ、取調べを終え、現場を離れた映司は……トボトボと歩きながら途方にくれていた。理由は簡単で、あの事件の影響で結局バイト代が貰えなかったからだ。

「……はあく。なんか代わりのバイト見つけないと……このままじゃ今日の宿も明日のパンツもなしだ……アイツもそろそろ戻る頃だろうしな……どうしよう？」

そうして考えながら歩いていると、

ピコ！ピコッピコピコピーン

そんな音が聞こえ目を向けると

「あれ？……『ライドベンダー』だ。ココにもあるんだな！」

そこには黒いボディに黄色いラインのある『自販機』があった。

「コレいろんな世界に在るけど誰が設置して「ドカアアアン」……！？なんだ!？」

急に聞こえた爆発音に周りを見回すと、少し離れた場所から煙が揚がっているのが見えた。それを見た瞬間、映司はそこに向かって走り出し……

「っと、その前に」

そう言って、『自販機』に足を向けた。

ここは、近日中に開催される装飾品展のイベント会場の屋外広場。そこは今、混乱の坩堝と化していた。

展示品を搬入していたトラックが、突然、謎の生命体に襲撃され横転したのだ。そして謎の生命体・蠅螂男は中の展示品を食い荒らし始め、それを見たスタッフ達や通行人はパニックを起こし逃げ惑いだした。

そんな人たちに目もくれず、『食事』を続ける怪人。

しかし、唐突にその場を跳躍する。すると、飛び退いたのに一瞬遅れて黄色い雷弾がその場を打ち抜く。蠅螂男が着地と同時に上へと視線を向ける。そこには、金髪のツインテールに黒を基調とした服装と白いマント、斧のような形のデバイスを持ったフェイトと赤いゴスロリ衣装に奇妙な兎が特徴的な帽子、ゲートボールのクラブのような形のデバイスを持ったヴィータの二人が空中から怪人にデバイスを向けていた。

「時空管理局だ！傷害、器物破損、先程の宝石店襲撃、および公共

物破壊の現行犯でお前を拘束する！」

フェイトがそう宣言すると、螭螂男は

「俺の邪魔を……」

両腕と一体化している鎌を構え、

「するなあああー!!!」

叫びながら大きく振りかぶると

シュババアアアン!!!

空気を切り裂くような音と共に黄緑のエネルギー刃が二人に放たれる。フェイトとヴィータはそれぞれ左右に広がるように回避する。そしてフェイトは

「・・・抵抗確認。鎮圧行動に出る！バルディツシュ!!!」

<Plasma Lancer>

フェイトのデバイス『バルディツシュ』の音声と共にいくつもの雷弾が生成され、フェイトがデバイスを振ると一斉に怪人に襲い掛かった。しかし、螭螂男は右に跳躍しそれをかわす・・・が、

「逃がすかよ！」

その先にすでにヴィータが回りこんでおりヴィータのデバイス『グラーファイゼン』を振りかぶって叩き込む。

ドゴンー!!

車の正面衝突のような音と共に螳螂男は吹き飛ばされ近くの壁に激突、その衝撃で崩れる壁と共に倒れた。フェイトとヴィータは着地してあたりを見回し

「これで終わりかな？」

「思いつきりぶつ叩いたからな、決まったる。・・・っか、何なんだあいつ？人間？虫？・・・それとも変身魔法か？」

「わからない・・・でも、さっき確認した限り生命体ではないみたいけど」

「・・・？・・・生き物じゃねーって、じゃあなんだよ？まさか『ガジエット』とか言うんじゃない・・・」

ヴィータの言葉に首を横に振るフェイト。

「まったく生体反応がなかったんだよ。・・・どちらかというとなルギー体に近いかも」

「・・・よくわからねーが、あとは拘束して調べるしかねーか」

「うん。・・・それにもしこれが生命操作技術で作られたとしたら・・・絶対に突き止めて止めないと！」

フェイトは少し影を帯びた表情で怪人の倒れたあたりに目を向ける。

「……そうだな」

フェイトの事情を知るヴィータは、ただそう答えるだけだった。

カラン

そんな小さな音が聞こえた……そう思った瞬間！

ガラガラガシャアアン！！

「シャアアアアアアアアアアア！！！！」

壁がさらに崩れる音と共に蠍螂男が雄叫びを上げて瓦礫を吹き飛ばしながら飛び上がって着地する。

「！！！！？」

決まっていたと思っていた二人は驚愕するが、すぐに戦闘体制を取る。

「おのれ！よくもやってくれたな！！」

明らかに怒り心頭の様子近づいてくる。

チャリーン・チャリーン・

すると、蠍螂男の身体からなにかが零れ落ちている。フェイトは落ちたものに目を向けると

（……メダル？）

怪人の身体から銀色のメダルが零れだしているのだ。それを疑問に思うよりも早く怪人が動いた。とんでもない跳躍力を使って、一気にフェイトへと肉薄する。

「!?!?」

「じゃあぁ!」

そしてそのまま両手の鎌で切り刻もうと振り下ろす。

<Defensor>

バルディシユの音声と共に魔方陣が展開し刃を受け止めるが

ピキッ!

一撃で亀裂走り、更なる一撃で

パキイイーン!!

儂い音を立ててくれる。さらに振り下ろされる刃を何とかデバイスで受け止めるが明らかにパワー負けしていた。

「・・・つく!!」

あまりの力に苦悶の表情のフェイト。そこに、

「フェイトから離れやがれ!このバケモンがあぁー!」

ヴィータがアイゼンを振って攻撃する。しかし、

「ふん！」

ドガッ！

「・・・！？・・・つかは！」

見向きもせずヴィータを蹴り飛ばした。ヴィータはそのまま壁に叩きつけられる。

「！？ヴィータ！・・・貴様！」

それを見たフェイトは激昂するが、それよりも先に螻蛄男の連撃が始まった。

「シャッ！シャッ！シャアアア！」

「・・・つく・・・つく！・・・くううう」

必死に凌ぐフェイト。距離をとろうにも激しい攻撃でそれもままならない。ヴィータも蹴りがよほど効いたのかまだ動けない。気ばかりはやり集中ができないフェイト。そこに

「シャアアア！」

ドカッ！

怪人の蹴りがフェイトに炸裂した。

「ぐううう!」

咄嗟に左手の手甲でガードし、自らもその方向へ飛ぶことでダメージを減らす。だが、それでも受けた左手が痺れていた。

(なんてヤツだ。・強い・つつ・分かってたことなのに・・・リミッターがココまで重いなんて)

そう、二人はとある事情で力の制限を受けている。そのため、普段ならまだしも強敵との戦闘では致命的になりかねない、それを強く実感するフェイト。そこによく回復したヴィータが駆け寄り

「大丈夫かフェイト？」

「うん。左手・少し痺れるけどいけるよ」

「なら距離を置いて空中から遠距離攻撃、隙を見て拘束バインド・場合によっちゃそのまま討伐・いいか」

『討伐』そう聞いたときフェイトは少し戸惑ったが、すぐに覚悟を決め

「・・・わかった。あのままだと被害が広がっていくからね。よろう、ヴィータ」

その言葉と共に二人は飛行魔法で距離をとった。その時、

- うわああああん -

「「・・・!?!」」

子供の泣き声が聞こえた。二人はすぐにエリアサーチを開始し位置を特定した。しかし、

「・・・そんな!」

「おいおい!!」

位置は、蟻螂男の近く。瓦礫の影で泣きながらしゃがみ込む小さな少女がいた。

《ヴィータ!私が奴の気をこっちに向ける、その間に・・・》

《あの子を助け・・・っておい!》

二人が念話で打ち合わせ行動するより早く、蟻螂男は少女に気づき鎌を振り上げる。

「だめええええー!」

「やめろおおおー!」

フェイト達の叫びも空しく、鎌は無常にも振り下ろされ・・・

「ちよつとまったー!!」

そんな叫びと共に割り込んできた影が少女を抱きかかえて転がって

行き、刃は空を切った。

螭螂男は空を切った鎌を見つめて、転がった影を見る。そこには、おびえた少女を抱きかかえ怪人をにらんでいる青年・・・火野 映司がいた。それに気づいたフェイト達は、

「あ・・・あの人！」

「パンツ男！何でアイツが!？」

二人の驚く様子をよそに映司は、

「だいじょうぶ?・・・さあ、早く逃げて」

少女を逃がしていた。それを見た螭螂男は

「おまえも邪魔するのかあああああ！」

叫びながら襲い掛かる・・・が、

「・・・てい！」

そんな掛け声と共に缶のようなものを二つ投げつけた。当然効果などなくあっさり弾かれて地面に転がる。だが、

カチャカチャ！カチャカチャカチャ！

< T A K K A - > < T A K K A - >

そんな音と音声を立てて転がった缶がひとりでに変形し鳥のような

形をとる。そしてそのまま飛び上がり怪人に襲い掛かった。

「!?!?..なんだこれは!?!?くそ!邪魔だ!!!」

飛び回りながら嘴でつつく機械の鳥。それに気をとられているうちに映司はフェイト達の方へ駆け寄り、二人も映司の方へ降りていく。

「あの!局員さん。大丈夫ですか?」

映司がそう聞くと、二人は、

「ばっつつかやろおおー!!なんつー危ない真似してやがんだてめーわああ!!!」

「そうだよ!ひとつ間違ったら君も死んでたかもしれないんだよ!というかどうしてこんなところに来たの!?!」

と、映司に怒鳴った。さすがにその剣幕に映司はビビッて腰を引く。そして

「えっと...こっちで爆発があつたみたいで気になって来てみたら女の子が『ヤミー』に襲われるのが見えて...あとは、夢中で...

「...本物のバカかお前は、それでお前が死んだらどうすんだ!」

「...!?!?ちよっ...ヴィーたちよつと待って!」

「なんだよ!」

フエイトが何かに気づき興奮するヴィータを止める。そして、映司を見て

「君、今あの怪物のこと『ヤミー』って言ったよね。もしかしてアレの事知ってるの?」

「・・・なに!?おい!ほんとうか!?!」

詰め寄る二人の迫力に押され後ずさりながら

「・・・えーと・・・知ってるってゆうか関わってるていうか・・・」

映司がそこまで答えたとき

バキッ!ガシャガシャ!!

蟻螂男・・・『ヤミー』は鳥を切り伏せた後、鎌を胸の高さに持つて行き左右の鎌と鎌の間に幾つものエネルギー刃を作り

「俺の・・・邪魔を・・・スルナアアアアアアアアア!!!!」

絶叫と共にそれを乱れ飛ばす。

「うわあー!?!」

三人は咄嗟に跳び伏せてそれをかわすが、バラバラに分断される。ヤミーはすぐに跳躍し倒れた映司に近づくと、襟をつかみ上げ桁違いの腕力で吊り上げる。

ギリリイイ!

「グ・・カハツ!」

締め上げられて苦しむ映司。

「その人を放せ!」

フェイトは起き上がって叫ぶが

「・・・よ・・・やま・・・な・・・」

「?」

ヤミーは何かを呟き、怪訝に思うフェイト。だがすぐに何をするつもりか気づき動こうとするが、それより早く

「『ヨクボウ』ノジヤマヲスルナアアアアアア!」

更なる絶叫と共に映司をボールの様に放り投げた。その先には、崩れて鋭利に尖った瓦礫。

「やべえええー!」

「間に合え!」

フェイト達は助けようと動くが

「シヤアアアアアアア!」

ヤミーの攻撃で妨害される。そして、映司はそのまま瓦礫に

「うわああああああ!!」

(…だめだ…間に合わない!)

ほんの一瞬で想像できる凄惨な未来図に咄嗟に目を逸らしてしまう二人。そして、

ガシッ!

「少し目を離しただけでなに死にかけてやがんだ。つくづくバカだなお前」

フェイトたちが声の方向を見るとそこには、瓦礫の突起に串刺し寸前で停まっている映司とその映司の首根っこを掴んで停めている、金髪で目つきの鋭い男が居た。

男は映司を離すと映司はドサツと倒れこみ痛がる。しかしそんな事にはかまわず男はヤミーを睨む。

「…ふん…まあまあ『貯まってる』な…。ま、今はこれくらいで良いか。ほかにも居るみたいだし…。おい!映司いつまで寝てんだとっと起きろ!」

「いててて。お前が急に離すからだろう!…ていうか何でここに?」

「ヤミーの気配がしたからな。それにどっかのバカが必ず首突っ込んでると思ってるな。そしたらバカが早々に死ぬ寸前ときやがった・・・バカか？」

「・・・あのさ、いくらなんでも『バカ』言い過ぎじゃないか？
『アंक』」

「ハッ！知るか。そんな事よりさっさと稼いで来い・・・ほらよ」

アंकと呼ばれた男はどこから黒いプレートに青いラインが奔り横並びにスリットが三つ並んだものを手渡す。それを受け取り映司は

「・・・なんかいつもより急かすな・・・」

そんな事を口にしながらプレートを腰の部分に持っていくすると

ジャララアアー！カチツ！

プレートからベルトが伸び腰に巻きつく。

「当たり前だ！あの『クソガキ』共にどれだけメダル持っていかれたと思ってるやがる！さっさとそれを補填したいんだよ！」

「あゝ！なるほど！」

怒鳴りながらフェイト達のほうへ歩いていくアंक、

「わかつたらとっとと倒せ！次もあるしな」

そう言いながら右手を握りこみ、再び開くと手には赤・黄・緑の三枚のメダルがあった。それを映司に向けて放り投げ、フェイト達の近くの瓦礫に腰掛ける。

「君はいつたい？」

「・・・あ？なんだまだいたのか？」

フェイトが声をかけるとまるで初めて気づいたような反応をする。

「さっさと失せろ。邪魔だ」

「な！？・・・なんだとてめー！！」

アंकの物言いにヴィータが激昂するが、まったく取り合わないアंक。さすがに頭にきたヴィータは、アंकに掴みかかるうとしたがアंकはその手をかわし逆にヴィータの口を押さえつけるようなアイアंकローを決め吊り上げる。

「はがつ！は・・・はやへ！・・・ほの！・・・ほの！」

ヴィータは慌てて抵抗するが外れる様子がない。

「ふん」

アंकは、鼻で笑ってヴィータを離す。

「あぐ！・・・痛〜！・・・この野郎！なに・・・す・・・ん・・・」

開放されたヴィータは文句を言おうとして『それ』を見て言葉を詰

まらす。フェイトはその様子を疑問に思いヴィータの視線を追うと
驚愕する。

「……………!?……………赤い腕!？」

そこ……………アंकの右腕の右肘から指先までが赤い色をした異形だ
つたからだ。

「てめー!!あの化けもんの仲間か!？」

ヴィータがそう言ってアイゼンを向けるが

「ば〜か。あんなザコとおれをいつしよにすんな」

そんな二人のやり取りを放置してフェイトは映司へ視線を向けると、
ヤミーに向かい合い立ちはだかる映司の姿があった。

「!?なにをやって……………止めないと!」

そう思つて飛び出そうとするフェイトをアंकが右手をかざして静
止する。

「!……………なにを」

「……………黙つて見てろ」

アंकの迫力に押され言葉を詰まらすフェイト。そして再び映司た
ちに目を向けると、

カシャ！カシャッ！カシャッ！

渡されたメダルをベルトになったバックルのスリットにはめ込む、するとメダルをはめた部分がカシャッ！と斜めに傾く。そのあと右腰にある丸い機械を取り外し構える。

・キユイイイイイン・キユイイイイイン・

手にした機械が起動し唸り始める。

「いったい何を？」

「あいつなにやる気だ？」

フェイトとヴィータは何をするのか理解できない。そんな二人にア
ンクはこう告げる。

「『変身』だ」

「『ヘンシン？』」

二人が聞き返したとき、映司は機械・・・『オースキャナー』を使
いバックル・・『オースドライバー』にはめ込まれたメダルを右か
ら左へとスキャンする。

キイン！キイン！！キイイイイイン！！！！

「変身！！！」

その言葉と共にオースキヤナーを胸元に持つてくる。すると、メダル型の光が映司の周りを回りだし

<タカ!><トラ!><バツタ!>

<TA・TO・BA!TATOB A!TA・TO・BA!
!>

奇妙な歌と共にメダル型の光も止まり、縦並びに赤い鷹・黄色い虎・緑の飛蝗のメダルが表示され、それらが、映司の胸部に重なるように収束し強い光を放つ。そして光が収まったとき映司の姿は『変わつて』いた。

黒いボディと胸部のサークルに刻まれている『赤い鷹』『黄色の虎』『緑の飛蝗』足は緑の脚甲、腕は黄色の鉤爪、顔は黒のフルフェイスに緑の複眼を持ち赤い鷹を模したマスク、そして額にガーネット色に輝く菱形のクリスタル。

「……なんだよあれ……?」

「バリアジャケット?…いや違う…あんなの見たことない。それに今の歌みたいなのはいい…」

「歌は気にするな!」

フェイト達はその変貌振りに驚き、フェイトがアंकに問いかける。

「いったい彼は何者なの?」

その問いにアंकはニヤリと笑ってこう答える。

「奴は……『〇〇〇（オーズ）』だ！」

「……オーズ……」

会話を続ける三人をよそにオーズとヤミーの戦闘は開始された。

「シャアアアア……！」

ヤミーは跳躍し斬りかかる。

ガキンッ！

「フッ……でや……！」

だがそれを手甲で受け止め押し返す。押し返されバランスを崩すヤミー。

オーズの胸のサークル……『オーラングサークル』の中央の虎の紋章が輝き、その光がサークルから伸びるライン……エネルギー流動路『ラインドライブ』を伝って手甲に溜まっていき、畳まれていた鉤爪が展開、その爪でヤミーを引き裂いた！

ザシュッ……ジャラジャラアアア！

すると切り裂いた部分から銀色にメダルが次々と零れている。

「……もしかしてあの怪物……メダルでできてる？」

そんなフェイトの疑問を余所に傷を押さえながら苦しむヤミー。

「グウウウウ！・・・メ・・・メダルが・・・おのれええええ！！！」

ヤミーは激昂するがかわらずオーズは追撃を開始する。

サークルの下段の飛蝗の紋章の光りがラインを通じて今度は足に溜まっていく。

「ん〜！きたきたー！力が溜まってきたー！！！」

そう言うとその場を跳躍した。

重力を無視したような水平跳躍でヤミーに近づきその勢いのまま

蹴りを放つ

キュバンツ！キュバンツ！キュバババンツ！

蹴りが炸裂するたび緑のリングのような余波が発生しヤミーを吹き飛ばす。しかし、

「グウウウウ・・・このおおお！！！」

ヤミーはすばやく受身を取り転がるように起き上がると、即座に斬りかかってくる。

ズシャツ！ズシャンツ！

油断したオーズは何度も胸部を斬りつけられ押し飛ばされた。

ジ・・・ジジジッ・・・バチバチ！！

「くううう！！・・・いててて！！」

その猛攻にたたらを踏むオーズ。それを見ていたアंक達は

「おい！押されてるぞ！」

「・・・あの連撃すごく速い・・・あのままじゃ・・・。」

ヤミーはパワーではなくスピードによる手数でオーズを押し始めていた。

それを見て助けようとするフェイト達・・・それを

「何度も同じこと言わせんな。黙ってみてろ！」

アंकは再び静止する。だが、当然フェイト達は納得しない。

「でも、あのままじゃ・・・。」

「お前！あいつがやられても良いのかよ！」

そんな二人を無視して

「・・・チツ！あの馬鹿なにやってやがる。・・・仕方ない・・・おい！映司！！！」

怒鳴りながら何かをオーズに投げる。

それをキャッチし、ヤミーを蹴って距離を離す。

オーズの手には緑のメダル・・・ただし、今度のメダルには螭螂の絵

が刻まれていた。

オーズはドライバーを水平に戻し、セツトされている真ん中の黄色い虎のメダルを外し、蠃螂とメダルと入れ替えドライバーを傾ける。そして再びオーズキャナーでスキャンする。

キーン！キーン！！キイイイイーン！！！！

<タカ！><カマキリ！><バッタ！>

変身したときののようにメダル状の光が回転し、音声と共に停止、収束したときオーズに変化が起きた！

黄色い鉤爪のあった手甲が肘の側に突起のようなパーツのある緑の手甲に変わる。

「！？形態が変わった！」

「なんだありや！？」

驚くフェイト達。

「！？・・・グッ！そんなこけおどしで！」

そう叫んでヤミーが襲い掛かる。その時、オーズの蠃螂の紋章が光り手甲のパーツが起き上がる。それを逆手に握ると双剣になる。そして、

ズバンツ！ズバン！！

ヤミーが斬りかかるよりの速く斬りつける。

「……すげー……ん？」

コロコロコロー

散らばったメダルの一枚が転がってヴィータの足に当たった。ヴィータはそれを拾って、

「こんなモンでできた怪物が出たり、メダルで姿が変わったり……何が起こってんだよ……いたい……」

そう呟くヴィータの手から赤い腕がメダルを奪い取った。

「返せ！それは、俺のメダルだ！」

「……うわっ！てめーなにしや……が……あ？」

いきなりのごとで文句を言おうとしたヴィータは『ソレ』を見て思考が停まる。

目の前に居たのは『赤い腕』だった。そう、ソレだけが宙に浮かんでメダルを奪い取り喋ったのだ。

「……」

「……」

「……」

フェイトも同じ光景を見て固まっている。そして、

第3話 ヤミーとグリードと人の欲望（前書き）

PV15000突破！ユニーク3000突破！

ありがとうございます！コレも皆様のおかげです。

コレを励みにがんばりたいと思います。

では、いつものように駄文ですが楽しんでもらえるようにねしていきます。

第3話 ヤミーとグリードと人の欲望

ここまでの魔法少女リリカルなのはOOO/Stickersは・
・
・

一つ！ フェイトとヴィータがヤミーと遭遇、戦闘を開始するが
苦戦する。

二つ！！ その戦いに映司が乱入、危機に陥るが異形の赤い腕を
持つアंकが現れ危機を脱する。

そして三つ！！ アंकが渡したメダルとオーズドライバーで
映司が変身！オーズとなってヤミーを撃破した！

Count The Medals!

現在、オーズの使えるメダルは・・・

タカ×2

トラ×1

カマキリ×1

バッタ×1

第3話 ヤミーとグリードと人の欲望

戦いのあつた場所から少し離れた臨海公園。

その中の一角の休憩所に映司たちは移動していた。

フェイトとヴィータ、映司は向かい合うようにベンチに座り、ア
ンクは近くの壁の上に腰掛け三人を見下ろしながら道すがら買った
アイスキャンディーを食べていた。

そんな中、フェイトは、

「・・・色々聞きたいことはあるけど・・・まずは、君達はいつたい『
何者』なの？」

そう言つて話を切り出した。

「えーと・・・何者つてゆーか・・・んーと、強いて言えば『旅人』
つて感じなんですけど・・・」

その返答にヴィータは軽く睨みながら

「・・・お前・・・ホントにそれで納得すると思つか？」

「ですよね〜」

「君もそうだけど、そつちの彼のこともあるし・・・正直に答えてく
れないと・・・その・・・強制連行つて形で署に来てもらつ事に・・・」

フェイトは少々ばつが悪そうに発言する。一応助けられた立場とし

てはそうしたくないと思っているのだ。

映司はアंकを見て

「・・・アंक」

「・・・あ？好きにすりゃ良いだろうが」

アंकはさもどうでも良いように答えると、二本目のアイスを食べ始めた。ソレを見たヴィータは、

「何他人事みたいに言ってるやがんだ！いちばん問題なのはおめーなんだよ！つーか何アイス喰ってたよ、バケモン！」

先程のヤミーとの戦闘、腕だけで飛び喋っていたアंक、未知の異形に連続して遭遇し警戒心のためトゲトゲしい態度で指差す。

するとアंकは壁から降りてヴィータに近づく

「!?!?・・・な・・・なんだよ！」

少し怯んでヴィータが言うと

「・・・俺だって味を感じてるぞ。・・・コレが『冷たくて』『旨い』のは分かる」

そう言ってアイスをほつばる。

「？」

ヴィータはアंकが何故そんなことを強調したのかが理解できなかった。

- この時、アंकの真意を理解できたものはいない。彼女達がそれを知るのはまだ先の話 -

ヴィータの疑問をよそにアंकはヴィータに異形の右手を近づけ手の平を見せて

「それとも・・・『こうして』喰えば納得か？」

そう言っただけで持っていたアイスを手の平に押し付ける。

「！？」

フェイトとヴィータはソレを見て固まる。アイスが手の平にズルズルと飲み込まれているのだから当然だが。それを見た映司は

「！！・・・ちよっ・・・人に見られたらどうするんだよ！」

慌てて周りを見回す。

「ふん！知ったことか・・・さて、説明しろってことだが・・・何が聞きたいんだ。答えてやるからさっさと済ませろ、まだこれから用があるんでな」

「！？答えてくれるの？」

「ああ・・・用があるからさっさとしろ！」

正直、素直に答えると思ってなかったフェイトは驚いたが頭を切り替え

「・・・じゃあ、まず・・・君は何者？」

こうして、魔導士と異形の第一次接触フェイストコンタクトは始まった。

800年以上前とある世界の人工生命を生み出そうとした錬金術師達によってそれは造られた。

『オメダル』

その世界の様々な生物の力を蒐集、凝縮してそれは造られた。その果てに造られたより大きく力を籠められた数種類のメダルがあった。

『コアメダル』

そう呼ばれたメダルは1種類10枚で構成されていたが、その中の1枚を抜き取り9枚という『欠けた』状態にすると『足りない故に満たしたい』という欲望を発生させ増幅、自律意思を持つまでに進化しメダルを肉体として構成し一個の生命体として誕生した存在・それが

「『グリード』．．つまり、俺達だ」

「．．．．．」

フェイトとヴィータはあまりにも途方もない話に言葉を失くしている。そんなことにお構いなしにアंकは続ける。

「だが、当時の錬金術師どもはグリードを造り出したはいいがまったく制御できなかった。だから暴れだしたグリードを止めるため抜き取ったメダルを使ってある存在を造り出した。コアメダルの力を制御し戦う存在．．俺達グリードを封印した存在．．それが．．」

「．．それが．．オーズ．．」

アंकの言葉に続くようにフェイトは、映司に目を向け呟く。ヴィータも同じように映司を見る。

「．．．．つて、ちょっと待てよ。封印されたんならなんでお前らがまた出てきてんだよ！おかしいだろ」

そう言っつてヴィータは疑問を口にする。

「解けたんだよ。4年前にな」

「！？解けたつて．．誰が．．！まさか火野さんが！」

「え！？ち．．違いますよ！」

アングの答えにフェイトは一瞬映司を疑うが慌てた本人が即座にそれを否定した。

「・・・そのバカに800年びくともしなかった封印がとけるはずないだろうが」

「え？・・・あ・・・そうなんだ・・・。あ！火野さん・・・あの、疑ってごめんなさい・・・その、つい・・・」

「いや、いいんですよ。そう考えるのが普通だし・・・あ、あと『映司』でいいですよ。そっちの方が呼ばれ慣れてるし」

「わかったよ、映司」

「・・・和むのはいいが続けるぞ」

そう言ってアングは話を続ける。

「・・・4年前貨物扱いで運ばれていた俺達を封じた『封印の棺』にオーメダルに似た力が干渉してな、封印が緩んだのさ。それを利用して何とか這い出た直後にでかい爆発が起こってな、それで完全に封印が解けたんだよ。・・・ま、その所為でコアまで吹っ飛んで行方知れずなんだが」

そこまで話を聞いたフェイトは何か引っかけりを感じ考えはじめる。

「（4年前・・・爆発・・・！）ねえ！それ場所がどこだったか分かるかな？」

「え？えつと、ミッド臨海地区にある空港ですけど。俺もその時にいつに会ったんで」

フェイトの質問に映司が答える。

「!?!」

「?どうしたんだよ、フェイト」

驚くフェイトを不思議に思いヴィータが尋ねる。それにフェイトは、念話で返事する

《二人が言ってるのって、4年前の大規模火災のことだよ。なのはとはやて、私が休暇中に巻き込まれた事故!》

《!?!マジかよ!じゃあこいつらその中に・・・》

《うん、たぶん。そう考えると色々符合してくるし》

《どういづことだ?》

《さっきアंकが『メダルの力に似た力』って言ったよね。たぶん、『レリック』のことだと思っ》

《な!?!?》

《あの事故の後しばらくしてから原因が密輸されてたレリックだって判明したんだけど・・・そうすると今朝の美術館のとき検出されたエネルギー反応が酷似してたのも辻褃合っしね》

《メダルの塊のヤミーが暴れたんならってことか》

《うん。・・・？そういえば、グリードとヤミーって・・・》

フェイトは、念話のなかで浮かんだ疑問をアंकに聞く。

「ねえ、アंक。グリードとヤミーって何が違うの？さっき倒した怪物もメダルできてたけど」

その質問を聞いてアंकは異形の右手を握りこみ、開く。

そこには、色のついた金縁のメダルと銀一色のメダルがあった。

「メダルは2種類あってな、『コアメダル』と『セルメダル』・・・
いいか、このアイスクャンデー。アイスの部分がセルで持ち手の
部分・・・棒がコアだ。コアを中心にセルがくっ付いているのが俺達
封印されてたグリード、オーズが倒したヤミーは棒のないアイスだ
と思っとけ」

そう言っアंकはアイスを齧る。

「俺達グリードにとって重要なのはコアメダルだ。ソイツが封印さ
れてた800年の内に何枚が無くなった、棒がなければアイスはく
っ付かない・・・。俺の目的はそのメダルをすべて集めて『完全な
身体』を手に入れることだ！」

映司達のいる公園から少し離れたビルの中にある銀行。その中のATMコーナーにそれは現れた。

「いらっしやいませ・・・!?!?きやあああー!..!」

案内の銀行員が悲鳴を上げる。そこには、ミイラ男・白ヤミーが立っていた。

「な・・・なんだ貴様!」

何人かの警備員が取り押さえようとしたが腕の一振りで打ち倒され気絶する。白ヤミーはジャンプしてカウンターを跳び越し金庫の前に立った。そして、金庫を力づくでこじ開け中に入っていた。

それと同時に警報が鳴り響いた。

「ま、コアほどじゃないがセルも大事なんでな、一応利害の一致してる映司こいつを使ってヤミーを倒してメダルを集めると・・・現状はこんなところか」

それを聞いたフェイトは、

「あのヤミーっていったいどうやって生まれてるの?」

「人間にセルメダルを入れるとヤミーが生まれる」

「なんだよそりゃ!何で人間に入れなきゃなんねーんだよ」

ヴィータの疑問に

「ハッ！簡単な話だ。セルメダルのもとになってんのは……！
！……メダルだ！おい、映司！来い！」

「わつと……行くつて、でも局員さん達は……」

「ほっとけ、そんなことよりこっちが優先だ！」

そう言つてアंकは映司を引きずっていく。それに気づいたフェイト達は

「……え！？ちよつ……ちよつと待つて！まだ、話が……」

「つてこら、てめーら！待ちやがれ！」

慌てて後を追う。

その場所に着いたとき、それは混乱の只中だった。

フェイト達はビルから逃げ出している人の波を掻き分けながら中に入るとそこには、

「ウヴァアアアアア〜！！！」

金庫の中で金塊を食べている白ヤミーがいた。それを見たヴィータは

「あれが、ヤミー・・・」

「そうだ、棒のないキャンディーだ」

そう話すアंकに映司は手を伸ばす。

「ん！」

「あ？なんだ？」

「ベルトとメダル、あれ倒すんだろう」

そう言う映司の手をアंकは払いのける。そして、

「まだだ。今アレを倒してもメダルは一枚しか手に入らない」

「え？」

アंकの言葉疑問を覚えるフェイト達。

「おい！どういうことだよ！まさか、お前の仲間か!?!」

ヴィータはアंकに掴みかかりそうな勢いで詰め寄る。

「勘違いすんな、アレは倒すさ。だが今じゃない。ヤミーは餌を喰って成長する。その後で倒せば何枚も・・・上手くすれば100枚単位で落とすからな」

「・・・どういうこと？それに『餌』ってアレが食べてるのは「欲望だ」・・・え？」

「なんだよ！どついう意味だよ！」

アंकの言葉を理解できずフェイト達は聞き返す。

「……『セル』も『コア』もメダルの元は……人間の『欲望』なんだよ」

その言葉にフェイト達は固まった。

人はその力で幾つモノものを生み出した。

家・ビル・街・国・科学・魔法・時空管理局、様々なものは人が『欲しい』と思うその『欲望』から生み出されたその塊ともいえる。そうして生み出されたもののひとつが、いま、形成そうとしていた。

「待つんだ」

アंकの声が今のフェイト達には聞いてはならない危険なものに感じる。

「ヤツが『それ』をメダルにして貯め込むのを」

フェイトもヴィータも耳を塞ぎたい衝動に駆られる。このまま聞いていると自分の中の何かが崩れてしまいそうな危機感に。

しかし、アंकの言葉はそれこそ魔法のようにフェイト達の弱い部分に滑り込んでくる。

「最高だな！コイツは稼げる。．．．しかし、復活して4年色々見てきたが．．．人間は変わったな」

『ヤメテ！』そう叫びたい衝動が大きくなっていく。

「800年．．．俺達が封印されている間にその欲望はさらに強く、でかくなった．．．」

その言葉に応えるように白ヤミーが変化する。その身体から這い出すように大型の昆虫型ヤミー．．．『オトシブミヤミー』が生み出され、元になった白ヤミーは崩れる。

「Giiiiiiiiiiii!!」

産声を上げたヤミーはビルの奥へ進んでいく。更なる欲望を求めて。

生み出されたヤミーの醜悪な外見にアंकの声が重なっていく。

「よくもまあ今まで滅びなかったもんだな。こんな『モノ』抱えて．．．ま、そのおかげで俺達が存在できるんだがな」

そう言って異形アंकは嘲笑わらった。

「！おい、映司！追っぞ！」

そう言ってヤミーの後を追うアंकとそれに続く映司。

固まっていたフェイト達もこのままにできないので急いで管理局に

連絡し避難誘導を始める。

しかし、その作業の中も二人に生まれた黒い霧のような感情は、フエイト達の心に重く押し掛かかり渦巻いていた。

『欲望』

それは多くのものを世に齎した源。

それは何かの始まりとなり

それは何かに終わりを齎した

それは何かの力となり

それは何かに滅びを齎した

人の世が続く限り恐らく尽きることのない無限とも呼べるような力

人はいまだそれを制御する術を見出してはいない……

第3話 ヤミーとグリードと人の欲望（後書き）

なんか・・・映司くんが空気だ・・・気をつけないと。

第4話 タコと剣と映司との約束（前書き）

第4話です。駄文ですがどうぞ！

コンボ表現少し変えました。

第4話 タコと剣と映司との約束

ここまでの魔法少女リリカルなのはOOO/Strikersは
・・・

一つ！ フェイトとヴィータはアंकから『グリード』の正体を
明かされその真相に迫る。

二つ！！ フェイト達と出会った美術館で生まれたヤミーは2体
だった！そして残りの1体は、『餌』を食べオトシブミヤミーに成
長。更なる餌を求めて暴れだした。

そして三つ！！ アंकからヤミーの餌が人間の欲望だと告げ
られ動揺するフェイトとヴィータ。そんな二人を他所にヤミーを追
う映司とアंक。フェイト達も避難誘導を始めるが、その心には言
いようのない感情が渦巻いていた・・・

Count The Medals!

現在、オーズの使えるメダルは・・・

タカ×2

トラ×1

カマキリ×1

バッタ×1

第4話 タコと剣と映司との約束

アंकたちと別れたフェイト達は、到着した局員に避難誘導を引き継ぎアंक達とヤミーを探していた。

すると、隣のビルから人が逃げ出しているのを見て、

「フェイト！あっちだ！」

「急ごう！」

逃げ出す人の波をかわしながらビルのホールまで来ると、そこには腕を組んで立っているアंकがいた。

「！！おめー何してんだよ！ヤミーは？・・・まさか、見失ったってんじゃない」

ヴィータが問い詰めようと近づいたとき、

「Giiiiiiiiiiii!!!」

「！！？」

壁が崩れる音と奇怪な咆哮と共にオトシブミヤミーが壁を食い破って現れた。

フェイト達は戦闘体制を執ろうとするがヤミーはそんなことに目

もくねずに反転すると壁に爪を食い込ませ這い上がるように攀じ登っていく。しかも、登りながら壁を食べ体大きくしていく。その様子を見たフェイト達は、

「おい！早く倒さないとヤバイだろ！」

「うん！…ねえアंक、協力して！」

一度ヤミーと闘ってその力を体感している二人はオーズの力が必要だと判断し協力を仰ぐ。

「あ？…まあ、別にかまわんが…」

「じゃあ！」

協力を得られたことを喜ぼうとしたフェイトだが、

「奴がこのビル食ったらな」

すぐに続けられたアंकの台詞に思考が停まった。

ヴィータはアंकに掴みかかり

「て…てめーなに考えてやがる！！このビルの避難までできてないんだぞ！中の人はどうなってもいい…」

「勘違いすんなよ？俺の目的はメダル集めだ。セルメダルがいるんでな」

ヴィータの手を払いのけアंकは言い放つ。ヴィータは言い返そうとしたがその時ビルが振動を起こし崩れ始めた。アंकは二人を放

つて外へ飛び出し、フェイト達もそれを追う。

三人がビルを出るとビルの外壁を食い破ってさらに巨大になったヤミーが這い出てくる。

そして次の瞬間、ビルの亀裂が一気に広がり倒壊し始め、さらに隣のビルに倒れ掛かった。

「……あ……ああ……」

「……そんな……」

その光景に呆然とするフェイト達。しかしアंकはそれを平然と眺めていた。それを見たフェイト達はアंकを睨んで、

「アंक……」

「……ため……こうなるって分かって……」

しかしアंकはそんな視線も何処吹く風といった感じで受け流し、

「ハッ！勘違いすんなって言ったろうが。俺を責めるならお門違いだ、ヤミーは『人間の欲望』に基づいて行動する。つまり、コレは人間の欲が招いた結果だ」

「……ただ、被害を最小限にすることをあなた達はできたでしょう！？」

「……そうだ！そうすりゃあ……」

そう言う二人にアंकは冷めた目を向けて、

「……色々世界周ったあのバカが言ってたがな……何処に行っても楽して助かる命はない」そうだ……」

「……？そんなの当然の……」

ヴィータが言いかけると、

「それと同じでな……『タダで助かる命』も無いんだよ」

「「！？」」

「人間を助けるのはお前らの都合だ。俺には関係ない。そもそも、ヤミーがここまでデカクなってんのも人間の欲の所為だろうが……まあ、自業自得だな」

「「……」」

ヤミーは『人の欲望』を餌に育ち、今の人間はそれをここまで巨大な怪物を生み出すほど大きい欲望を持っている。

「よくもまあ今まで滅びなかったもんだな。こんな『モノ』抱えて……」

アंकがいった言葉が頭の中でリフレインする。心を覆う霧のような感情がさらに大きくなっていく。

二人は未だにビルを食べているヤミーを見る。その醜悪な外見を目の当たりにし

・アレヲウミダシタノハニンゲン・ナラ・ヒトノカチハ・

そんな言葉が心にちらつきだしたそんな時、ふっと、必死に子供を助けた映司の姿を思い出した。

「・・・あれ、そういえば・・・映司は？」

「・・・あ！」

フェイト達がそう言うと、

「・・・あ？・・・あのバカ、いつの間に・・・どこに・・・！・・・まさか!?!？」

どうやらアंकも気づいてなかったようだが心当たりがあるのか倒壊しているビルに目を向けた。それを見たフェイト達は首を傾げたが、

・えつと・・・こっちで爆発があったみたいで気になって来てみたら女の子が『ヤミー』に襲われるのを見て・・・あとは、夢中で・

そんな台詞を思い出しアंकと同じように未だヤミーが這い回っているビルに目を向けた。

倒壊したビルが倒れ掛かったビルの高層階のガラス張りの展望室では、その日、立食パーティーが開催されていた。

しかし、突然の隣接するビルの倒壊とそのビルがこの建物に倒れ掛かったときの衝撃で壁はひび割れ、料理や机、展示物が床に散乱しもはや華やかなパーティーの面影など残っていないかった。

だが、そんな場所に腰を抜かし逃げ遅れた中年の男がいた。男は何とか逃げようと立ち上がるうとするが上手くいかず取り残されたのだ。そこに、

「Giiiiiiiiii!!!」

ガラスを割って窓枠を掴み這い上がってきたオトシブミヤミーが現れた。

「ひっ……ひiiiiiiiiー!?!」

男は四つん這いになって逃げようとする。しかし、ヤミーは男に目もくれずさらに上に向かうため六本の足で這い上がるうとする。しかし、運の悪いことにそのうちの一本が窓枠を掴み損ねそのまま伸びて男に引っかかった。

「!!!!!!??. . . あああ!!!」

そのまま、引っ張られて窓枠から放り出されそうになる。

「ひiiiiii! . . . た . . . たすけて . . .」

そうやって必死に伸ばした手を掴む者がいた。そしてそのまま男を引き寄せると、引っかかっていた服がちぎれ男は解放される。

「 . . . た . . . 助かった? . . .」

「安心する前に早く逃げてください！ここは危険です！」

安堵していた男に急かすように逃がす人物・・・火野 映司がそこにいた。

映司は、男が避難したのを見て安堵するが、次の瞬間！

「・・・！！・・・お・・・ああ・・・とっ・・・」

ビルがさらに振動し映司の足元が崩れだし、バランスを崩した映司はそのまま窓の外へ落ちてしまう。間一髪のところまで歪んで迫り出した窓枠に掴まるがぶら下がった状態でいつ落ちてもおかしくない様子だった。何とかよじ登ろうとして腕を伸ばすが上手くいかず、もう一度伸ばした腕を赤い異形の腕が掴んだ。

「・・・アंक」

「・・・バカにも程があるぞ！お前に死なれちゃ困るんだがな」

そう言って映司を引き上げようとする。映司は腕だけのアंकを見て

「おい！お前が離れたら『あの人』が！」

「他人の心配してる場合か？・・・ほら、さっさと変身しろ」

そう言ってアंकはコアメダルを出す。しかし映司はぶら下がったままアंकを睨んだ。

ちょうどその時フェイト達がビル内の避難を終えて展望室に入ってきたところだった。そして、転落寸前の映司を見て助けようとするがその前に聞こえてきたエイジの言葉に立ち止まってしまふ。

「・・・アंक・・・前も似たようなことがあって『あの子達』や『あの人』のこともあって有耶無耶になつてたけど・・・今！ここで約束しろ！」

「あ？」

今まさに転落寸前の状況で映司はアंकに告げる。

「俺が变身したときは絶対变身させる！・・・つつ・・・人の命よりメダルを優先させるな！・・・でなきゃ・・・つくあ・・・に・・・二度と变身しない！！！」

「なっ！・・・お前・・・」

フェイト達は映司の言葉に何かを感じた。いま自分の中の黒い霧のような感情を払う何かを。

しかし、状況はアंकの返事を待たずに動き出した。

ヤミーが屋上にまでたどり着き再び暴れだし、その振動で映司の掴まっていた窓枠が崩れ映司は落下した。

「!?!?・・・いけない!!」

「くそ!!」

「映司!!!!」

フェイト達は助けようと飛行魔法を展開し飛ぶ。しかしそれより速くアंकが映司に追いつき映司の懐からオーブドライバーを取り出し映司に装着しメダルを映司に渡す。

「おら！さつさと・・・」

「約束するのか！しないのか！」

絶体絶命の状況ですら意志を曲げない映司に、

「・・・っ・ああ！分かった！！早くしろ！」

それを聞いた映司は即座にメダルをセット。そして、オースキヤナ
ーを使つて、メダルをスキャンし

「変身！！！」

<タカ！><トラ！><バッタ！>

<TA ・ TO ・ BA！T A T O B A！T A ・ TO ・ B A！
！>

「ふん！ぬうううくおおおお・・・とまれええー！」

変身した映司は即座に腕のトラクローを展開しビルの壁に突き刺す。
それでも落下が止まらず壁を引き裂きながら減速して行き、そのま
ま下に降り積もっていた瓦礫の山に突っ込むが瓦礫に突っ込む瞬間、
バッタレグの力で勢いを逸らすように跳躍、空中を捻る様に回転
しながら着地した。

「・・・ハアツ・・・ハアツ・・・た・・・助かった〜」

無事に着地した映司・・・オーズは安堵する。

りかけてるよ！」

そう言つてフェイトはヴィータを宥める。言われたヴィータも少し涙ぐみながら深呼吸を始めクールダウンする。フェイトはオーズを見て話し始める。

「・・・ヴィータは少し興奮しすぎてたけど言ってることは間違いないよ？・・・どうして君はこんな無茶してまで・・・」

「・・・俺は・・・」

映司がフェイトの問いに答えようとしたその時、

ブロロオオオオオー・・・キイッ！

エグゾーストを響かせて黒いバイクと黒いライダースーツに黒のフルフェイスヘルメットを被った女性が、映司達の近くに停車する。フェイト達は不審に思うが行動するより早く相手が動き出した。女性はヘルメットを外すとブラウンのロングヘアが広がり、少しだけだるげな様子の美女が顔を覗かせる。その後女性はバイクの後ろに積んであるリボンで梱包された大きな長方形の箱を持つとオーズに近づいて来て、

「火野さん。どうぞ、ある方からの誕生日プレゼントです」

「あ！あなたは・・・って、へ？・・・あ・・・いや俺今日誕生日じゃないんですけど・・・」

「なんでも『オーズと二人の魔導師の絆』の誕生日だそうです」

「……二人の魔導師って……」

「私たち？」

「なんだそりゃ？」

困惑する三人。そんなことは気にもかけず女性はプレゼントを紐解き開封する。そこには、

「!・・・これ!?!」

「!?!」

「!?!? (なんだと!?!?)」

黒い刀身青と黄色のラインが奔り青いクリスタルのような材質の刃、鍔にあたる部分にレバーのような部品とメダル用の投入口《スロット》がある片刃の大剣……

「『メダジャリバー』です」

女性の台詞を聞きながら映司たちはその剣の威容に驚いていたが、アंकはそれとは別のことに驚いていた。その剣の入っていた箱に添えられている『セルメダル』……しかも、剣にメダル用の投入口があることからメダルの使用が前提だということがわかる。

(『ベンダー』や『カンロイド』といい、人間がセルメダルを利用して……封印されてる800年で人間に何が起きた?)

オーズはメダジャリバーを手にし、

「・・・すっげー!!! うん!これなら」

ヤミーのいる屋上を見上げる。

「あと、コレもプレゼントだそうです」

女性はそう言うと近くにあった黒いボディの自販機・『ライドベンダー』に歩いて行きベンダーにセルメダル数枚を投入、ディスプレイのボタンをいくつも押す。すると、

< TAKO-KAN >

メロディーと共に機械音声が流れ、大量の青いラベルの缶が排出される。缶はあつという間にあふれ出し、小山を作る。

女性はその中の一つを手に取りプルタブを開け手の平に乗せる。そうすると、缶がカチャカチャと軽い音を立てて変形し青い頭のタコになった。

< TAKO-O! >

「!?!」

「『タコカンロイド』です」

驚くフェイト達とマイペースに説明する女性。女性はタコカンロイドを放り投げるとタコは足をくるくるとプロペラのように回転しだすと宙に浮いた。しかも、それに続くように山になった缶が一斉に

変形したコの群れになり飛行を始める。そしてそのまま編隊を組みビルの屋上に向けての『道』を作った。

オーズはそれを見て女性の意図を理解しベンダーに走り寄る。それを見たフェイト達は何をするのかとそれを注視する。

オーズはベンダーにメダルを一枚入れ、ディスプレイのさらに下機体の中央の大きな黒いボタンを押す。その瞬間、ベンダーは音を立って変形し前に倒れ込む。そこには、

「…………ウソ…バ…バイクになった!？」

「……………かつけ……………」

そう、女性が乗ってきたものと同じ黒いボディーのバイクになっていた。いた。

その時上で暴れるヤミーの所為で崩れたビルの一部が振ってくる。オーズは素早くバイクに跨りアクセルを捻り発進させそれを回避しフェイト達の近くで停車する。

「あ、剣にもメダル入れといてくださいね。では、がんばってください」

女性はそう言うと自分が乗っていたバイクに乗り去っていく。

「あーありがとうございます！」

オーズはそう言って女性に礼を言うと、改めて屋上を見る。そして発進させようとしたとき、

「…………あ!?!…………ちよ……………」

「・・・』なんでこんなことするのか・・・でしたっけ？」

「・・・え？」

呼び止めようとしたフェイトにオーズが話しかける。オーズは自分の手の平をじっと見つめる。その姿を見たフェイトは

(・・・まるで泣いてるみたいだ・・・)

仮面で表情などわからないのになぜかそう思った。

「・・・泣いてるから・・・」

「え？」

「泣いてるから・・・助けなきゃ・・・それに手を伸ばせば助けられるのに、手を伸ばさなかったら・・・死ぬほど後悔する・・・だから、手を伸ばすんだ！！」

そう言つてオーズはバイクを走らせタコの道を使い屋上へ登って行き、アंकもその後を追つて飛んでいった。

そんな二人を呆然と見ていたフェイト達だったが、

「・・・ハア・・・』助けられるのに手を伸ばさなきゃ後悔する・・・」

・か
」

ヴィータは、頭を掻きながら呟き、

「・・・うん・・・当り前の事なんだよね・・・」

フェイトは空を仰ぎ見る。

二人は眼を閉じて思い浮かべる。

掛け替えのない親友を

今度こそ守ると誓った友を

彼女は頑なだった私に手を伸ばし名前を呼んでくれた

アイツは自分を傷つけたあたしを助けようと手を伸ばし話し合おう
と歩み寄ってくれた

私（あたし）は、そうしてココにいる

「・・・なっつさけないな・・・あたしら」

なのに、いつからだろう・・・

「うん・・・情けないね・・・」

それが当り前になったのは・・・

「しかも、戦えるからってトーシロの民間人に・・・」

当り前すぎて見えなくなっていたのは・・・

「うん・・・教えられちゃったね」

「だけど・・・ちゃんと思いついた」

「このままじゃ『あいつ』に合わせる顔がないな」

大切な事を

「・・・それは、困っちゃうね」

だから

「ああ・・・だからよ」

もう一度

「そうだね」

手を伸ばす為に

「バルディッシュー!!」

「アイゼン!!」

< Yes sir >

< Ja >

「行こう!!」

そうして、二人の足下に魔方陣が展開し輝く。まるで、心に巢食った闇を吹き散らさんばかりの輝きが放たれそこから金と紅の光が飛び立った。

『彼女』の様に自分達も助けを必要とする誰かに手を伸ばす為に・

タコの道を使い屋上近くまで登ってきたオーズは屋上で暴れるヤミーを見つける。

そして、ヤミーの上まで登るとバイクごと道から飛び降り滑り込むように着地し、それと同時に剣でヤミーの足を斬りつける。するとメダルが飛び散り屋上から落ちていく。それを追いついたアंकが体一（腕）を駆使して取り込んでいく。

オーズは再び斬りつけようとバイクで接近するが、

「Giiiiiiii!!!!」

「!?!?!?!?! わああああ!?!」

ヤミーは節くれ立った指のような形をした爪を使いバイク後とオーズを弾き飛ばす。オーズは何とか飛び降りて転落は免れるが、その

拍子にバイクと剣が屋上から落ちてしまう。
そして、再び振り下ろされる爪を何とか回避するがすぐに屋上の淵
まで追い込まれた。

「・・・げ!?・・・やばっ・・・」

そんなオーズを見てアंकはすぐにメダル・カマキリメダルを取
り出す。

「映司・・・つたく、なにやってんだ・・・ほらよ!」

そう言つてメダルを投げ渡す。

「・・・へへ・・・ちよつと油断した・・・」

そう言うとオーズは起き上がりベルト中央のトラメダルとカマキリ
メダルを入れ替えスキャンする。

<タカ!><カマキリ!><バッタ!>

音声と共に黄色の腕　トラアームが緑の腕　かカマキリアームに変
化、腕のパーツが起き上がり双剣

カマキリソードになりそれを構えてヤミーに斬りかかる。

「はっ!・・・はあああ!・・・はっ!はっ!はっ!セイヤー!」

「Giiiiiii!?!」

オトシブミヤミーの巨体を利用して体の下に潜り込み連続で斬りつけ、
ヤミーの攻撃を転がりながら回避し更に斬りつける。

オトシブミヤミーはその巨体ゆえ這っている体の下・・・腹の部分が死角になる、そこを突く作戦だ。

「イヤッ！はっ！・・・はあああ・・・セイヤー！！」

「Giiiiiiii!!?」

更に力を入れて斬りつけると、ヤミーはズンツと重い音を立てて倒れた。

オーズは両手のカマキリソードを見て、

「はああー、何度使っても使いやすいなーコレ・・・」

そうやって感心していると、

「・・・Giiiiiiii!!!!!!」

「!?!?・・・つく・・・うわああああ!!!!」

倒れていたヤミーがいきなり起き上がり頭でオーズを跳ね飛ばす。屋上を飛び出し落下するオーズ。

「!!!!やば・・・しかたない、こうなったら『アレ』で・・・」
どうにか体勢を整え切り札を切ろうとしたオーズだったが、唐突にそれを中断した。なぜならば、

「へっ！なんだよ、あれだけかつこつけていきなりピンチかよ?」

そんな声と共にオーズに足場ができたからだ。

声の主は紅いゴスロリ風の騎士甲冑を着たヴィータだった。

「!!!きよ…局員さん!どうし「ヴィータだ…」…え?」

「あたしの名前だ、ヴィータ。一緒に戦うんだ名前くらい知っててもバチはあたらねーだろ」

「…でも」

「でももへちまもねー!手を伸ばさなきゃ後悔するって言ったのお前だろうが!」

「!?!?」

「だから、あたし『ら』も戦う」

「…え?…あたし『ら』って…」

オーズが疑問に思った瞬間、空に雷光が走った。

驚いて空を見ると雷をまとい杖を振るうフェイトがいた。

驚いているオーズにヴィータが、

「あたしとフェイトがやつの動きを抑える。その間に決めろ!」

「……すみません」

「バーカ。こついつときは謝るもんじゃねーよ。あと、ホレ!落としモンだ」

そう言うと落ちたはずのメダジャリバーを投げ渡す。オーズはそれ

を受け取り、

「……ありがとう!」

「……うっし!じゃあお前をあそこまで『飛ばす』からな……舌噛むなよ」

「……へ?」

オーズは疑問に思う……『飛ばす』……『運ぶ』なら分かるが……そう思った時、ふと、足場を見る。

唐突にできた足場は人が乗れるほどの大きさの四角い箱を組み合わせたような形状のハンマーだった。

……そのハンマーを持っているのはヴィータで、そのヴィータの『飛ばす』宣言……

(……まさか)

オーズのいやな予感を肯定するように

「アイゼン!カードリッジロード!」

<Ja!! Explosion!!>

とても力強い声が聞こえ、ガシャン!とハンマーから薬莢が排出されとオーズの立ち居地の反対側にブースターのようなものが出現し、

「いくぞ……!」

「いや！ちよつと!?!」

<Yahoooo!!!>

「『やふー』じゃなくて!!?つてかマジで!?!」

オーズの言葉に耳も貸さずブースターに火がつき、オーズごと横回転をはじめ、あつというまに高速回転に達しそのまま、

「いつけー!! ラケーテン・シュラーク!!!」

「めちやくちやだああああああ」

屋上まで『ぶつ飛ばされた』。

少し時間を戻し、屋上では・・・

「Giiiiiiii!!!」

「バルディツシュ!!!」

<Thunder Rage>

フェイトがヤミーと戦っていた。展開した魔方陣から雷光が放たれヤミーを拘束し、そして魔方陣を貫くように杖を振るつ。

「サンダー・レイジィィィ!!!」

か・・・

そしてそのままヤミーの上空まで差し掛かると

「・・・ちよつと、アंक邪魔!!」

「うお!?!」

顔からアंकを引き剥がし放り捨て、カマキリメダルをトラメダルに変えスキャン、

<TA ・ TO ・ BA!TATOB A!TA ・ TO ・ BA!
!>

基本形態となる『タトバコンボ』にチェンジ、落下を始めると同時に剣を構えヤミーの背中に着地と共に剣を深く突き刺す。

「Giiiiiiiiiiiiiiii!!?!」

悶え苦しみ暴れだすヤミーに振り落とされないように剣をさらに深く突き刺す。すると、暴れまくった結果ヤミーは屋上の柵を破って屋上から落下した。

落下する前にヤミーから飛び降り屋上に着地するオーズ。

下では足をばたつかせ落下するヤミーにヴィータが近づき、

「好き勝手暴れやがって・・・アイゼン!」

<Explosion! Gigant form!!>

デバイスからカードリッジが二発排出され、ヴィータがそれを振りかぶると同時にハンマーが巨大化、ヤミーと同じかそれ以上に大き

くなり

「轟・天・爆・碎！・・・ギガント シュラーク！！！」

巨槌を思い切り振り下ろしヤミーをぶつ叩く。ヤミーはメダルを撒き散らして隕石よろしく地上に叩きつけられた。

「・・・ヴィータちゃん・・・スゴッ！」

「ちょっとやりすぎだよ・・・ヴィータ・・・」

その光景を屋上から見ていたオーズの横にフェイトが降りて来る。

「・・・あ！・・・えっと」

「・・・フェイト。フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。・・・フェイトでいいよ」

「・・・あ、はい。ありがとうございます・・・フェイトさん」

そういった後下を見ると、ヤミーが起き上がるうとしていた。それを見たオーズは追撃のために下に降りようとすると

「下まで運ぼうか？」

「いえ！大丈夫です！自分でできます！！！」

「え？・・・そう・・・？」

フェイトの提案を即座に断るオーズ。さすがに即答で断られたことにフェイトは少し落ち込むが、オーズはオーズで先程のヴィータの『運び方』に若干トラウマに近いものを受けていた。

そんなオーズにビルの周辺を浮遊していたタコカンロイドが近づいてきた。それを見たオーズは、

「あ！そうだ！タコ君サポートよろしく！」

そうカンロイドに告げると屋上から飛び降りた。

フェイトは驚き飛行魔法で後を追うが地上にタコカンロイドが集まりまるでトランポリンのようにオーズを受け止め着地させたのを見て、

「・・・はあ・・・今日一日でどれだけ驚いたのかわかんないよ・・・」

溜息をつきながら降下した。

オーズとフェイトが地上に着いたところにアイゼンを担ぐようにしてヴィータが話しかけてくる。

「やっぱり、あたしらじゃ決定打にならねーな」

ふらつきながら起き上がろうとするヤミーを見て呟く。

「そうだね・・・じゃあ当初の予定どおりにヴィータと私で足止めして・・・」

「オーズが止めを刺す・・・できるか？」

二人はオーズを見る。オーズは手にした剣を見つめて、

「はい！やれます」

力強く応える。それを聞いた二人は頷きあつて、

「じゃあ・・・行くぞフェイト！」

「うん、ヴィータ！」

「お願いします！フェイトさん！ヴィータちゃん！」

オーズはそう言うのと離れたところに倒れているライドベンダーに向かって走り出した。

「私達も・・・って、ヴィータどうしたの？」

なぜか剣呑な不陰気のヴィータに首を傾げるフェイト。

「・・・・・・・・・・なんでフェイトは『さん』であたしは『ちゃん』なんだ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・今はそれは置いてこう・・・ね？」

「・・・まあいいけどよ・・・（後で覚えてるよ・・・）」

ヴィータがぼそりと呟いた言葉を聴いて心の中で合掌するフェイト。しかし、すぐ気を取り直して二人は行動を開始した。

ライドベンダーにたどり着いたオーズは壊れてないか心配したが、
ヴオオオオオオン！！

何の問題もなく呻るエンジン。

（コレホント何でできてるんだらう？・・・っと、そんなことより
！）

色々疑問に思うがそれを頭の隅に追いやり持っている剣を見る。

「確か剣にメダルを入れるんだっけな」

女性の言葉を思い出しベルトの左側についている筒状のケース・
『オーメダルネスト』からセルメダルを三枚取り出す。そしてそれ
を剣のスロットに投入しレバーを押す。すると、メダルが刀身にあ
るクリスタルユニットに装填されるのが見え、剣が輝きだし力を増
す。

「・・・漠然とだけ使い方が『分かる』・・・ベルトの力？・・・ま
あいいか。それじゃあ！」

バイクに跨りアクセルを全開にしフェイト達によって足止めされて
いるヤミーに向かって走り出した。

オトシブミヤミーの周りを飛び回りヤミーを翻弄しているフェイトとヴィータは聞こえてきたエンジン音に目を向ける。そこには、こちらに向けてバイクで疾走するオーズの姿。それを見た二人は、

「バルディッシュュ！」

「アイゼン！」

その声と共にヤミーの足や首に光の輪が出現し拘束する。

フェイト達はただヤミーの周りを飛び回っていたのではなく、『リングバインド』を設置しタイミングを図っていたのだ。

そして、拘束を確認した二人は、

「オーズ！！！」

「はい！！！」

後をオーズに託し、オーズはそれに応え走りながら剣を上段に構えヤミーの下に潜り込む。

「はあああああああ！！！！・・・ついでにコイツも！！！」

ヤミーの腹を切り裂きながら剣のクリスタルユニットに収まり露出しているメダル三枚をオースキャナーでスキャンする。すると、

<Triple Scanning Charge!>

機械音声と共に剣の刃が蒼く輝き、ヤミーの体を潜り抜け後ろを取ると剣の柄にあるトリガーボタンを押しながらその場でバイクをスピンさせ方向転換しその勢いのまま

「セiiiiiyaaaaー!!!」

剣を振りぬく。

「え!?!」

「な!?!」

声を上げるフェイト達。当然だ。オーズの一撃は、

ヤミーを

ビルを

空を

景色を

『世界』を斬り裂いた!

世界に斬撃と同じ軌道の蒼い線が奔り、世界がズレる。
しかし次の瞬間映像を巻き戻すように

景色が

空が

ビルが

ヤミーを残して元に戻り、ヤミーは爆散しメダルを撒き散らした。
大量に降ってくるメダルを見て

「・・・こんなにたくさん・・・」

「うおおお！俺の！俺のメダルだー！」

「っていつかお前、早く『あの人』の体に戻れよ!!」

いつの間にか戻ってきたアンクー（腕）は降り注ぐメダルに狂喜乱舞し、オーズは別のことを心配してアंकに走り寄った。

そんな二人を少し離れたところで見ていたフェイト達は

「なにやってんだ？あいつら・・・」

呆れるヴィータと深刻な様子のフェイト。

「？・・・どうしたんだよフェイト」

「・・・え？あ、うん。あの二人・・・どう扱うべきかなって・・・」

「・・・あゝ・・・」

それを聞いて周りを見回す。ビルに寄りかかるように倒れるビル、散乱する瓦礫、鳴り響くサイレン。

これが、立った一匹の怪物の被害・・・そして、アंकに聞いたとおりならそれを生み出す存在がこのミッドに存在しており、それに有効に対抗できるのはオーズだけのようだ。

ヤミーのような怪物が次々生み出されたらと考えると背筋が寒くなる。

そして何より、オーズの力・・・世界すら斬り裂くその力を目の当たりにしそれがもしも、悪用されたら・・・

「・・・とりあえず、『はやて』に相談するか」

「うん、そうだね。なら映司達にも話さないと・・・あれ？」

「ん？どうした・・・って、あれは」

二人の視線の先にはアंकが使っていた『体』があった。少し気になり近づくと二人。

「アイツなんで自分の体切り離して動いてるんだ？」

「『完全な身体』を取り戻すって言ったからそれが関係してるんじゃないかな」

疑問を口にしながらヴィータは『体』の頬をつつく。

「・・・コレがメダルでできてるって信じらんねーな」

「ちよつとヴィータ、勝手に触つたら・・・<・・・サー>・・・？バル
ディッシュ、どうしたの？」

<人間のようですが>

「・・・うん、だから良くできてるなつて」

<違います>

「ちがつつて・・・」

<安全上の理由でスキャンしましたが・・・その体はまぎれもなく『
人間の体』です>

「「！！！？」「」

『人間の体』・・・確かにバルディッシュはそう言った。つまり・・・
それは・・・
そこへ、

「くそ！離せ、映司！まだメダルが・・・」

「だからそれは戻つてからにしろつて！・・・結構時間たつてるしこ
のままじゃ『あの人』が・・・」

「『この人』がどうなるの？」

映司が声の方を見ると、厳しい表情をしたフェイト達とその足元に
横たわる『体』。

「説明……してくれるよね？」

「……え……と……」

やさしく話しかけているが、誤魔化しを許さないそんな威圧を放つフェイト。そしてそれに押される映司。
そこへ、アंकが進み出て

「それは、俺が拾って使っている『人間』だ」

そう告げた。

……オーズとアंकの謎がはさらに深まった……

Count The Medals!

現在、オーズの使えるメダルは……

タカ×2

トラ×1

カマキリ×1

バッタ×1

第4話 タコと剣と映司との約束（後書き）

オリジナル要素込みの戦闘シーン上手く言ったか不安です

閑話 動き出す欲望へもの〈たち〉(前書き)

映画を見に行き、最終回を見てあがったテンションで一気に書き上げました。

少し短いですがどうぞ！

あの人(?)達の登場です。

閑話 動き出す欲望へものゝたち

オーズがヤミーを倒した翌日・・・まだ日も明けてない早朝。

とあるミッド郊外の森・・・そこでは今異変が起きていた。

黄・緑・灰・青 4色の光がいくつも踊り、その周りを銀の鈍い輝きが円を描いて乱舞する。

その光をよく見るとその光の正体は・・・『メダル』だった。

やがて4色のメダルはそれぞれの色で集まり、そこに銀の光・・・『セルメダル』が集い形を成していく。

やがて、人型になったメダルは光を放ち変化し、光が収まると4体の怪人がいた。

黄の光は豹を思わせる頭に銀のスパイクの付いた黒い鎧と爪を持った姿に。

緑の光はクワガタの角を生やした緑の複眼を備えた虫の頭に緑と黒の甲虫を模したような鎧を纏った姿に。

灰の光はサイのような短く頑丈そうな角を生えた灰色の鉄仮面のような頭と下半身を重厚な装甲で覆った姿に。

青の光はシャチを思わせる頭と蛸のような意匠の足を持つ女性体の姿に。

「・・・？・・・なんだ？・・・このカラダ・・・ヘンだ・・・？」

灰色の怪人・・・『重量の王・ガメル』は、首を捻る。

「・・・決定的に足りないのよ・・・メダルが・・・それも『コアメダル』が！」

青の怪人・・・『深海の女王・メズール』がそれに気づく。

「何故だ！・・・メダルが勝手に無くなる筈がない！」

緑の怪人・・・『甲虫の王・ウヴァ』が怒鳴る。

「アंकが握ってるの見たよ」

黄の怪人・・・『猫獣の王・カザリ』が答える。

「「「！？」」」

カザリ以外の三体が驚く。

「ア・・・ンク」

「・・・まさか・・・存在すら危うく見えたのに・・・」

「やつめ！目覚めても喰えない奴・・・！」

「あははは・・・あーあ・・・」

アंकを思い出す4体だったが、唐突にウヴァが動き出した。

「ウヴァ・・・どうするの?」

「決まっている!アングの奴から取り戻す!」

怒鳴るウヴァにカザリが

「でも、アングの奴・・・『オーズ』と組んでるみたいだよ?」

「!?!なんだと?・・・本当か?」

「懲りないわね・・・彼・・・」

驚くウヴァと呆れるメズール。

「・・・ねえ、ウヴァ。アングに会うなら僕から行かせてくれない?」

「なんだと?」

「・・・確認したいことがあるんだ。それに僕達ここ四年間封印の影響で動けなかったから散歩したいしね・・・この『新しい世界』を・・・」

「・・・そういえば・・・何故奴だけ自由に動けたんだ?」

「恐らく・・・あの爆発の前に這い出たからでしょうね。アレがなければもっと早く復活して『世界』を好きに飲み込めたのに・・・」

「・・・まあ、そういうわけだから行ってくるよ・・・」

そう言つてカザリは歩いていった。
それを見送るメズールとウヴァ。そして、まったく気にもかけず飛んでいる虫を追いかけて遊ぶガメル。

彼らはアंकと同じ『グリード』強力な力を持ち世界を飲み干さんとする怪人。

この日、ミッドチルダに過去類をみないほどの厄災が蘇った。

数時間後の朝。ここは、ミッドチルダ首都『クラナガン』・・・その中にある高層ビル。

『^{こしうがみ}鴻上フアウンデーション』

その最上階に位置する会長室に音楽と共に歌が流れていた。

「Happy Birthday to YOU」

歌を歌っているのは厳つい顔の壮年の男・・・鴻上フアウンデーション会長『^{こうせい}鴻上 光生』。
部屋に設置された最新型のキッチンでケーキに生クリームでデコレーションしていた。

「Happy Birthday to YOU」

「会長」

歌っている鴻上にスーツ姿の女性秘書・・・『里中 エリカ』。彼女は昨日オーズを援護した人物だ。

「『グリード』・・・確認できていた『鳥の王・アंक』以外の4体の復活が確認されました」

そう言うと里中は部屋のディスプレイに映像を表示する。そこには、つい数時間前のグリード達の映像だった。

「Happy Birthday Dear・・・」

そこまで歌い上げた鴻上はケーキの仕上げとしてチョコで文字を書く。その文字は

『Happy Birthday Dear Greed』

「Greed」

そしてケーキを持ってディスプレイの映像を見ながら

「H a a p p y B i r t h d a y t o o o Y O U u u u
u」

高らかに誕生を歌い上げ、笑顔で里中に

「どづかね？」

手にしたケーキを差し出し、

「いただきます」

里中は笑顔で食べ始めた。

それからさらに数時間後、昼も近い時間。

クラナガンから少し外れた住宅地。その一角にある

『多元籍料理店・クスクシエ』

日替わりで色々な次元世界の料理を出す店として最近人気になっている料理店だ。

その店内にある通信端末の前で机に突っ伏している青い髪をツインテールにした少女がいた。

「……うう……」

不満げに端末を見る少女に後ろから声がかかる。そこには、ブラウンの髪をショートカットにした少し冷たい目をした少女がいた。

「……何をサボっているんですかあなたは、開店時間が近いんです迅速に準備を終わらせてください」

「……うう……だって、エイジから連絡来ないんだもん……つまらないよー」

「それと店とは関係ないでしょう。それに、端末を持ってないエイジがそうそう連絡できるはずがないでしょう?」

ショートカットの女の子が呆れながら溜息をつく。ツインテールの少女は音がしそうなほど勢い良く起き上がりショートカットの少女を見て

「そんなことないもん! エイジ達が旅に出る前にアंकが最新型の端末いじってるの見たもん!」

「……どういことですか?」

その言葉を聞き声の温度が下がるショートトの少女。しかし、それに気づかず続けるツインテールの少女。

「旅に出る少し前に買ったって言ってたから、エイジに旅先で連絡させてねってお願いしたもん! ……なのに全然連絡来ないし、こっちから連絡しても繋がらないし……」

「(たぶん着信拒否してますねそれ……私達に隠していたこととい……) ……あの『バカ鳥』 寝が足りませんでしたか……」

「?」

よく分からず首をかしげるツインテールの少女。

「つまり……アंकの所為です」

「!?!? そうなの! うー! あんくううー! あんなにお願いしたのに—

「!!」

シヨートの少女の説明で怒り出すツインテール少女

「・・・まあ、それに関してはいずれ落とし前は着けるとして・・・とりあえずあなたは開店準備を始めてください」

「え〜でも・・・」

「チエコに迷惑がかかりますよ？」

「!!・・・そうだった!玄関掃除してくる!!」

そう言うのと玄関に向けて走って行った。

シヨートの少女は溜息をついて再び開店作業に戻ろうとするが

「くくく、妹分は世話が焼けるな」

そう声をかけられその方向を見る。店の奥に一段高くなっている場所に玉座を燃した大きな椅子がありそこに尊大な態度で座る銀の短髪少女がいた。

「そう思つのでしたらあなたも手伝ってください。・・・とゆうか何故あなたは戦闘衣装を纏っているんですか？」

そう、銀髪少女の着ている服は紫と黒と金の色を使った『騎士甲冑』と呼ばれるものだった。

「問題なからう。今日は『ベルカの騎士フェア』だぞ?これ以上相応しい装いがあるか!」

「……まあいいですけどね……なんですか？」

説得をあきらめたのか肩を落とすが銀髪少女が愉快そうに笑うのを見て怪訝に思う。

「いやなに。我等もずいぶんと『変わった』と思ってな……以前の我が懐かしく思える……」

銀髪少女は懐かしむように語る。

「私達が『この世界』に来てまだ一年と経ってませんが」

「……お前は相変わらずノリが悪いな……つまらんぞ……」

「つまらなくて結構です。コレが私ですから……しかし……」

「ん？」

「『変わった』という意見には同意します。正直のところ以前の私ならこうしている自分を想像すらしてなかったでしょうし」

「……ふむ……だが……」

「ええ、悪くない……」

二人は感慨深げに話す。そこに、

「おーい！玄関の掃除終わった……って！二人だけでなに話してたの？……僕もまぜてよー！」

戻ってきたツインテール少女は、仲間はずれにされたと思ったのか
頬を膨らませて文句を言う。
そんな様子に二人は、

「こやつはあまり変わってないような気がするが・・・」

「しかし、一番変わったような気がしますね・・・」

「？」

二人の台詞に首を傾げるツインテール少女。そこに、

「おはよー！みんな今日もよろしくねー！」

元気な声と共に快活そうな感じの女性が店内に入ってきた・・・
チヨビ髭と鎧を着けて・・・

「おはようございます、チエコ」

「チエコ！おっはよー！」

「うむ、おはよう」

女性の格好をスルーして挨拶する三人。ココでは良くあることなのだ。
だ。

女性の名は『チヨコ』シライシ『このクスクシエの店長だ。』

チエコは挨拶する三人を見て笑顔になる。

「うん、今日は『ベルカの騎士』フェアだから常連さんの他に聖王教会の騎士さんも予約してくれてるから ちよっと忙しいかも・・・
だいじょうぶ?」

そうチヨコが問いかけると

「問題ありません」

「だいじょうぶ!」

「愚問だな」

その答えに満足したチヨコは

「『シユテル』ちゃん」

「はい」

答えるシヨート少女。

「『レヴィ』ちゃん」

「はい!」

「元気よく答えるツインテール少女。」

「『ロー』ちゃん」

「『むむむ』」

尊大な態度で答える銀髪少女。

「じゃあ今日も一日がんばりましょうー！」

「「「おー！」「」」

この店のいつもの光景だった。しかし、

「あ！そうそう。みんな、映司君たちがミッドに帰ってきてるって知ってる？」

「「「！？」」「」」

「あら？その様子だと知らなかったみたいねー」

「チヨコ、その情報はどこで？」

「情報ってゆうか・・・」

そう言っただけでチヨコは今朝のニュース映像を端末に表示する。

・ 昨日未明、美術館で起きた爆発事故と同様の事故が立て続けに二件起きた件で管理局は『現在調査中』との発表をしておりますが事故の当事者は『怪物が暴れまわっていた』などの証言をしており・・・

「これは・・・」

「これのね、ココーココのとこー！」

そう言って画面の隅の所を指す。そこには、

「映司ですね」

「エイジだ！」

「間違いないな・・・」

映司が金髪の女性と赤毛の少女と映っている映像だった。

「ねー！映司君がいるならアंकちゃんもいるだろうし・・・久しぶりねー。元気かしら？」

そういうチエコを他所に三人は念話で会議していた。

《二人ともどう思いますか？》

《本人なのは間違いないから。恐らく『怪物』というのは》

《ヤミーだよな・・・》

《まあ、そこまではいいですが・・・一緒に映っていた二人・・・》

《鉄槌と・・・》

《フェイトだよ！間違いない！》

《だとすると拙い事になっているかもしれない・・・》

《どーいづこと?》

《フェイト達は管理局員だそんな奴らがオーズの力を知ったら……》

《最悪『自分達が管理する!』くらいは言いかねませんね……》

《だが奴らの性格ならその辺の塵芥共よりは話せよう。それに映司を見て悪人と思うのなら余程の節穴だぞ?》

《それもそうですが……一番拙いのはアंकです。より正確には『アंकが使っている体』がです》

《!あつそうか。そういえばアレって……》

《そうです。これに関しては絶対に納得しないでしようし……》

《で、あるつな……ならどつする?》

《どつするの?》

《……まあ、不安ですがアंकが付いてますから……早々捕まるとは思えませんし……とりあえず様子見といったところですか》

《良いのそれで?》

《良い悪いではなく、それしか打つ手が今はないですからね》

《我等が乗り込む……という手も面白そうだが……場合によって

は状況が悪化するか・・・》

《・・・次のクスクシエの連休に行動しましょう》

《間が空くな・・・大丈夫か？》

《彼女達がヤミーに脅威を感じたならば必ずオーズに協力を仰ぐでしょう。その場合アंकが交渉するはずです。あのせこいアंकなら対等以上の条件を出すでしょうし・・・少なくとも映司が危険になる確率は減ります。映司とある程度行動すれば警戒も解けるでしょうその時の方がこちらの説明もしやすいですしね》

《なるほど・・・ならそれで良からう》

《・・・ねー・・・二人でむつかしーこと言ってないでさー。どうするの？》

《レヴィ、今度の連休映司に会いにいけますよ》

《ほんとー！》

《ええ、ついでにアंकの『躰』も行います》

《分かったー！》

《ではそういついって》

《うむ》

《わーい エイジに会えるー》

そう締めくくり念話を切る。

「どうしたの？」

「いえ、次の連休にでも会いに行こうかと思ひまして」

「あら！いいわね・・・って、あ！その日私用事が・・・」

「こちらにも顔を出すように伝えますよ。安心してくださいチヨコ」

「そつ？ならお願いね」

そう言った時、チリチリーンとドアに取り付けてある鈴がなった。

「あら！もうこんな時間。じゃあ、開店しましょう」

チヨコがそう言うと三人は玄関に向かう。そこに客が入ってきたのを見て

「いらしゃいませ」

「いらっしゃーい！」

「うむ、よく来たな」

「クスクシエによつこそー！」「」

笑顔で出迎えた。

こうして、新たに動き出した欲望^{モウ}たちは物語の舞台^{モウ}に向かった。

その日の深夜、公園のベンチで大量の弁当を食べる肥満の男がいた。

とても幸せそうに弁当を食う男。そこに、

「ふーん・・・おもしろいかも。コレでいいか」

そんな声が聞こえ男がそれを確認する前に

「その欲望・・・開放しなよ」

・・・チャリーン・・・

ミッドの夜空に欲望の音が響いた・・・

閑話 動き出す欲望へものゝたち（後書き）

色々立てたフラグを回収中。なお作者はゲーム版をやったことがないので彼女たちの性格がおかしいかもしれません。ご容赦ください。

第5話 迷子と狂気と謎のメダル（前書き）

今回はオリジナルになります。・・・ちょっと不安・・・
とりあえずいつもどおり・・・駄文ですが楽しんでもらえるとうれし
いです。では！

第5話 迷子と狂気と謎のメダル

魔法少女リリカルなのはOOO/Strikers ここまでのハイライト・・・

無欲な旅人『火野 映司』と800年前に封印され腕だけ復活し完全復活するためメダルを集める『怪人グリード』の『鳥の王・アンク』はひよんなことから『機動六課』魔導師、『フェイト・T・ハラウン』と『八神 ヴィータ』に出会う。

人の欲望から生まれる怪物『ヤミー』と『オーズ』へ変身して戦う映司。

その圧倒的な力を見て脅威を感じるフェイト達・・・。

しかし、映司の『人を助きたい』という思いを知り歩み寄りかける・・・だが！アンクが使う『体』がメダルではなく『人間の体』だと気づき警戒心を強めてしまう。

そんなことが起こる中・・・アンク以外の4体のグリードが復活！失われたコアメダルを求めて行動を開始した。

失われたメダルを手に入れるのはグリードかオーズか、それとも人の欲望か・・・その先に待つものは果たして・・・

第5話 迷子と狂気と謎のメダル

映司達がヤミーを倒した日の夜、フェイト達の尋問を終えた映司とアンクは日も暮れていたのでフェイト達が近くのホテルに部屋を取りそこに『処遇が決まるまで待機』と言いつけられたので部屋で

大人しくしていた。

「……はあ……これからどうなるんだろう……」

さすがに不安になり溜息をつく映司。

「くつくつく……今頃あいつらもそれを考えて頭抱えてるんだろうよ」

赤いシルクのような布を敷いたベットで横になってアイスを齧るアंक。それを聞いた映司は、

「……お前、今度は何企んでるんだよ」

「……上手くいけば俺にもお前にも悪い話じゃないさ……」

「いや、お前のその言葉は不安しか覚えられないけど……」

そういう映司にアंकは体の向きを変え話し出す。

「……いいか？今日の戦いで分かったがあいつ等は『使える』」

「……色々言いたいことあるけど……続けて……」

「お前と同じでお人好しのバカの類で、なによりヤミーに通用するほどの力がある。それに聞きだした話じゃあいつらと同等クラスの魔導師が同じ部隊にいるらしいからな……上手くすれば戦力と情報収集、体の調整の三つが一気に向上する。そうすればメダルも集まりやすいし、お前も都合がいいだろ？『こいつ』の為にな」

そう言っつて自分の『体』を指差す。映司は、

「でもさ、この四年間で俺達がやってきたこと考えたら・・・協力どころか逮捕じゃない？」

「さっきも言っつたがなあいつ等は『お人好し』だ。お前と同レベルのな・・・だから全部話したんだしな・・・」

「・・・でも・・・」

「ま、いざとなればオーズの力で蹴散らせばいい」

「いやよくないだろ！！！」

「まあ、少し待ってる。どちらにせよあいつらの返答待ちだ。俺は寝るぞ」

そう言っつてアंकは目を閉じて横になった。映司はそんなアंकを見て溜息をつきベットに寝転がって天井を眺めた。

「四年か・・・色々あったな」

そう呟いて思い出すように目を閉じて・・・疲れていたのかそのまま眠りに付いた。

その頃別室のフェイト達は映司達の話の裏付けの為資料を調べていた。

アंकの持っていた端末からの情報と管理局の事件資料を照らし合わせているところでフェイトが大きな溜息をついた。それを見たヴィータは、

「・・・大丈夫かよフェイト」

「・・・うん・・・」

あまり元気がない返事が返ってきた。

ヴィータは本当に厄介なことになったと思い、先程製作した映司達の調書を見る。

端的に纏めると以下のとおりだ。

火野 映司 (ひの えいじ)

18歳

第74管理世界出身

・
・
・

犯罪歴・及び罪状

前科無し

ただし、過去四年間における研究施設襲撃及び破壊行為、情報略取などの疑いあり

件数 36件

となっていた。これだけならさすがにフェイト達も映司達を拘束するのだがそうしない理由は罪状の最後に

なお、襲われた施設は全て違法研究を行っていた疑いがあり、以下調査中

の一文があるからである。

アंकが渡したデータには実験内容の記録やそこから繋がる研究施設の場所の情報など様々で、施設自体も巧妙に隠され管理局が見逃してきたものばかりである。

管理局の事件資料には痕跡や当事者の証言があった。

曰く、犯人は空飛ぶ腕だ。

曰く、犯人はおかしな格好で暴れまわった魔道師だ。

曰く、現れた怪物と共に施設を破壊した。

等々、色々あり要領を得ない。管理局側の資料には映像データで残っているのは事件後撮影されたもので、どうやら襲撃時の記録映像はアंकが消していたようである。ただ、実験内容の記録は完全に残っており、内容もアंकのものと同じだ。

「……………」

「……………」

もう一度記録を確認するフェイトは、怒りをあらわにしており唇を噛みながら記録映像を見る。

ヴィータも怒りは覚えるものの、それ以上にフェイトの様子を心配していた。

フエイトはその生い立ちから生命操作実験などに対して人一倍敏感に反応してしまうからだ。
話を戻すとこの内容に裏付けが取れば映司は『研究施設襲撃犯』から『違法研究を止めた功労者』くらいまで立場が変わってくる。しかし、ここにアंकが加わると途端ややこしくなる。
アंकに関しては以下のとおりである。

アंक

年齢不明

出身世界不明

・
・
・

特記事項

メダルの集合した生命体。現在腕だけの不完全な状態。それを補う為違法研究の被害者の体に乗っ取り活動。被害者の体は実験の為とても不安定かつ危険な状態でアंकが憑依することで生命を保っている。

言動、情報収集能力から知能は高く性格は好戦的。『怪物』を生み出す要因となりうる存在の為要注意。

被害者の体を開放する意思是今のところなく、『体』を使つての恫喝に近い行為もあるため人格的にも注意が必要。襲撃事件の計画を立て実行に移した主犯。

となっている。

はっきり言えば危険人物で拘束したいところだが、オーズはアंकと映司がそろって成立するもので、さらに『体』の件で強行に出ら

れない。

『善人』の映司と『悪人』のアंक、そして二人をつなげる利害『オーズ』。対極の二人だからこそ余計に扱いが難しくなる。フェイト達は、この奇妙な関係の二人をどう扱うべきか頭を悩ませそのまま夜は更けていく。

- 四年前 -

薄暗い森の中二つの影が動いていた。

一つはは民族衣装のような服を着た少年。

一つは宙に浮かぶ紅い腕。

映司一（14歳）とアंक。

二人が出会った空港火災から1日が経過していたが、彼らがいるのはその空港から遥かに離れた・・・というより完全に別の次元世界だった。

普通なら一日で移動できる距離ではないはずの場所に彼らがいる理由は、

「・・・まさか、転送系ロストロギアの暴走に巻き込まれるなんて・・・」

「・・・くそ！人間もつくづく面倒なもの作りやがって」

溜息をつく映司と悪態をつくアंक。

空港でのヤミーとの戦闘の際、倒したヤミーの爆発で誤作動した口

ストロギアが映司たちを転移させたのだ。

「あ！そういえばあの子大丈夫だったかな？」

「・・・知るか！っていうかお前はまず目の前の問題に集中しろ！バカが！」

そう、今二人が直面している問題は単純かつ深刻だった。
『迷子』である。

なにせ何処に飛ばされたのか分からないうえ飛ばされた場所がとんでもなく大き木が生い茂る大森林で昼間でもあまり日が当たらずアंकに木の上まで上がって見てもらったが見渡す限り森ばかりで目印になるようなものも無し・・・正直かなりマズイ状況である。唯一の救いは旅食べられる植物や湧き水があったので食料を確保できたことだが、それもいつまで持つかという事である。そうして歩くこと数時間が経ち休憩しようかという時に、

「・・・！？」

「？・・・アंक？」

「少し黙ってる・・・」

そう言って周りを右へ左へと浮遊するアंक。
そして、ある方向を向くと

「・・・かなり弱いが・・・間違いないか・・・」

「？」

意味が分からない映司は首を傾げるがそれにかまわずアंकは進み始めた。

「ちょっ、ちょっと待ってよアंक！一体何処に・・・」

「メダルの気配だ」

「!?!」

大まかにではあるがメダルやヤミーの説明を聞いていた映司は言葉の意味を理解し聞き返す。

「ヤミーがいるのか？」

「・・・ああ、そのはずだ・・・」

妙に煮え切らないアंकに不安を覚えるが、他に行く当てもない為アंकについていくとそこには、

「・・・これは・・・」

「・・・ここか・・・」

森の中に隠れるように白い建造物が建っていた。

「結構大きいなー何の建物だろう?」

「さあな・・・だが此処からヤミーの気配が・・・あっ」

「?・・・どうしたんだよ?」

「……………どうなってやがる?…」

様子がおかしいアंकに映司が声を掛けようとした時

<その君、一体此処に何の用かな?>

「!?!?」

それと同時に固まる映司と咄嗟に映司の陰に隠れるアंक。
見ると近くに外部スピーカーがありそこから声がしていた。

<……………ふむ、答えられないのであれば不審者として拘束させて
もらうが?>

「いや!?!?…あの…道に迷って此処まで来たんですけど…
すいません、ここって何処ですか?」

とりあえず素直に話すと、

<……………そちらに警備員が向かう、大人しくすれば危害は加えな
い>

当然といえば当然の返答だった。

なにせ、この周辺はでかい木生い茂る大森林……というかもはや
秘境に近い。そんな場所に大した装備もない子供が一人『迷子です』
とくれば不審以外の何者でもない。

慌てて映司はここに来た経緯をアंकやオーズのことを伏せて話
した。

<そのニュースは今もやっているよ。・・・一応辻褄は合つか・・・>

声の主は考え始めるがそこに映司が、

「あの！空港のニュースやってるんですよね？・・・被害とかがってわかりますか？」

<?・・・煙はまだ上がっているみたいだけど魔道師隊の活躍で死者はいないそうだけど・・・>

いきなりの質問に意図が読めなつかた声の主はとりあえず答えると、

「・・・はあ・・・じゃああの子ども救助されたんだ・・・よかったです！」

心配事がひとつ無くなったと安心して笑う映司。そんな様子を見てなのか声の主は、

<ふむ、君は面白いね・・・いいだろう、今扉を開けるので入ってきなさい。ただ、ここは機密情報なども扱っているので行動はこちらの指示にしたがってもらおうよ?・・・いいね>

「あ！はい・・・すみません。帰る方法さえ分かればお暇するんで・・・

映司の返事と同時に目の前の扉が開く。

<まあ、どござ>

声にしたがって入っていく映司。中に入ると、

「……うわー、真っ白だな……なんか研究所みたいだ」

映司がそう呟くと

「実際、研究所だからね此処は」

「!?!」

後ろからのいきなりの声に驚き振り向くとそこには眼鏡を掛け髪を首の後ろあたりで縛り尻尾のようにしている細身で24・5歳ぐらいの柔和な笑顔をした男性が立っていた。

「どうも初めまして。私はこの研究所の所長をしている シビエ・トリス というものだ」

「……あ! ……えっと、火野 映司です」

相手の紹介にお辞儀して名乗る映司。シビエは笑顔のまま続ける。

「迷子ということだったが近くの町までは送るけど……実は近くの町に行くのに転送装置を使わないといけないんだけど、今その装置が故障中でね少ししたら直るから案内する部屋で待っていてくれるかい?」

「……え! ……そうですか……分かりました。本当にすみません、お手数かけて……」

「ははは、良いんだよ。困ったときはお互い様だ。あ、部屋にはお茶やお菓子もあるから好きにつまんでて良いよ……つとここだよ」

話しているうちに到着し部屋に入る。シビエはそれを見て

「私は仕事があるから失礼するが、この部屋から出ないように。さつきも言ったがここは機密レベルの高い研究をしているから不審な行動をとるとそれなりに対応しなくちゃならないからね・・・分かったかい？」

「はい」

「よろしい、では」

そう言ってシビエは部屋を出た。少しして映司は、

「・・・はあああゝ、緊張したゝ」

盛大に息を吐いて脱力した。

「『それなりの対応』か・・・アイツ大丈夫かな？」

そう言つて天井を見上げる。

実は先程の会話中・・・

- おい！映司 -

- 何？アंकク -

- とりあえず俺はここを調べる。時間稼いどけ -

- !・・・おい、あんまり無茶しないでよ -

「じゃあなー」

とこんな感じで今アंकは別行動中である。
そんなことを考えていると、

ぐううううー！

映司の腹がなった。

「……草だけで他何も食べてなかったもんな」

そう言っつて机の上の茶菓子に目を向け、

「食べていいって言っつてたし・うん、いただきまーす」

そう言っつて食べ始め少しすると疲れが出たのか眠くなってきた。

「……ん？…ふああああ…ねむ…ぐうう…」

目をこすりながらうつととしだしそして、そのままソファに倒れこむように眠りについた。

その頃アंकは、研究所の地下にある広い空間にいた。

「……800年も経つと人間も変わるもんだな…いや、むしろ変わらさずさらに愚かになったのか…」

そう呟いて自分の目の前の光景にくっくくと皮肉な嘲笑をする。

それは広い空間にずらりと並ぶ大きなカプセルであり中には幾つかのコードと緑の半透明な液体。そして、大小いろいろな種類の・・・

『人間』

さらにその頃研究室では・・・

「・・・ああ、私だ。・・・さっきの指示どつりに頼むよ・・・ちよつどいいだろう？データは多いに越した事はないんだから・・・ああ、では一時間後に・・・大丈夫だよ。彼は・・・火野 映司君はきつと・・・」

そう言ってシビエは柔らかな笑みを浮かべて、

「良い実験体モルモットになってくれるよ」

そうやって通信を切ると画面に別の研究室のデータと通路の映像を表示する。

通路の映像には研究員に運ばれる映司の姿が。そして、もうひとつのデータ表示は、

「ふふふふふ……もう少しだ……ふふふふふ」

シビエの顔が狂気の愉悦に染まる。その視線に映るのは……

丸い黒縁に白の円盤、表面を黒い線が奔り何かの絵柄を表している

一枚の『メダル』だった。

Count The Medals!

この時、オーズの使えるメダルは……

タカ × 2
トラ × 1
バッタ × 1

第5話 迷子と狂気と謎のメダル（後書き）

さていかがだったでしょうか？

次回オリジナルの戦闘開始・・・不安だ・・・でも、がんばりたい！
それでは！

第6話 モグラと新たな事実と逆鱗（前書き）

第6話です。

前回あとがきで戦闘開始宣言したんですが・・・上手くいかなか

った（汗）

とりあえずいつものように駄文ですがどうぞ！

第6話 モグラと新たな事実と逆鱗

前回の魔法少女リリカルなのはOOO/Strikersは・

一つ！四年前、アंकと出会ったばかりの映司はロストロギアの暴走で見知らぬ森に飛ばされる。

二つ！！迷子になった映司達は森の研究所を見つけ研究所所長シビエ・トリスに保護される。

そして三つ！！別行動をしていたアंकは研究所の地下で違法実験が行われカプセルに入れられている何十人もの『人間』を見つける。一方映司は眠らされシビエに実験体として捕獲される。そして、別室で笑うシビエの目にはアंकの持つものとは違う一枚の『メダル』が映っていた……

side 映司

……あれ？……寝ちゃったんだ……色々あつたし疲れてたんだな……？……色々……何だっけ？……えーと……「おい」……なんか重要なことだったよ「おい！」うな……「おい！起きろ！このバカ！」……あーもう……うるさいなアंकは……！！……そうだ！アंक！
うん！思い出した思い出した！そうだよ、アंकだよ。……「……チツ……仕方ない……」……マズイ……なぜかそんな気

がする・・・早く起きないと・・・。
そうして俺は目を開けて、

「とつとと起きろ」

自分に向かってくる赤い拳を見た。

side 映司end

第6話 モグラと新たな事実と逆鱗

映司は痣になつた顔を擦りながら周りを見回してからアंकに問いかける。

「・・・ここ何処？さっきまで応接室みたいなのに居た筈なんだけど・・・？」

「このドアには『処置室』とか書いてあつたが・・・というかお前なんでこんな所にいるんだ？」

アंकの問いに映司は首を捻りながら考えとりあえず覚えているところまで話すと

「・・・一服盛られたか。ってことはお前人体実験寸前だったか、運のいい奴だ」

足元に倒れている研究員を見て処置される前にアंकに助けられた事を理解する。

「……………マジで？」

「ああ。ココの奴ら中々いい感じに欲望に塗れてるからな。とつくに理性なんてもの捨ててるんだろうよ。……………しかしお前は何で捕まってたんだ？」

足元の研究員を指差し笑ってから疑問を投げかけるアंक。

「え？…だって、親切にしてくれたし…そういう人だとは……」

「嘘つけ、お前あの男が笑い掛けてきた時……『警戒』したんだろう？？」

「……………」

「お前は勘かなんかは知らんが表に出さないだけで奴がヤバイと感じてたんだろうが。なのに、何でそいつが勧めたもん喰ってたんだ」

「……………いや、お腹が空いたんで……つい……」

「……………マジか？」

「……………」

「……………初見であいつの本質に気づいたと思えば、今度はあつ

さり罫に掛かる・・・バカなのかそうじゃないのか判別しづらいな
こいつ)」

「とりあえずこれからどうするの?」

「こいつらからは大した情報が聞けなかったからな。他の奴を探してを吐かせる。気になることがあるんでな」

そう言っつて床でのびている研究員を指す。

「そういえば、ここにヤミーがいるんだよな。見つけたのか?」

「いや」

「え!?!じゃあ早く見つけないと・・・」

「そうしたいが・・・おかしな事に上手く気配が探れなくてな・・・」

「なんで?お前ヤミーが出たら分かるって・・・」

「だから『おかしい』っつってんだろっつが!ここにヤミーがいるのは間違いない、だがどういいうわけか気配が『薄い』から追いつらいんだよ。・・・つくそ!出たり消えたり鬱陶しい!」

説明しながら悪態をつくアंक。しかし映司にはよく分からなかったが気を取り直して話を進める。

「とりあえず一番近くの気配のした場所に行ってみたらどうかかな? 痕跡くらいあるかもしれないし」

「・・・一理あるか・・・ならさっさと行くぞ」

「って！ちよつと待ってよ！」

さっさと飛んでいくアंकを慌てて追う映司。そうして特に誰かに見つかることなく目的の場所へ辿り着く。

「………罨か？」

アंकは不審に思う。真つ当でないとはいえここは研究所だ。警備システムもあるしいくらなんでもここまで来るのに誰にも会わないなどどう考えてもおかしい。

映司もさすがにおかしいと思っっているのか警戒を強めていた。

「ま、どつちにしる進むしかないんだが」

そう言つて扉の開閉スイッチを操作し扉を開ける。

扉の上には『資材処理施設』と刻まれたプレートがあった。

その光景を見て映司は絶句し、アंकは愉快そうに嘲笑う。

そこは、アंकが見たものとは違い『研究用』として扱うのではなく用済みの『廃品』として人間を扱う場所だった。

高い天井のレーンに吊るされた吊るされたカプセルが大きな機械に通され出てくるときには『中身』がない空っぽのカプセルが排出、それをクレーンが床に立てて並べていく作業を繰り返していた。

あまりの光景に呆然としていた映司だが正気を取り戻したとたん機械に近づき手当たり次第に操作して止めようとするがまるで止まらない。そう理解した映司は、アंकに

「アंक！メダル！この装置壊して止める……！」

そう言って催促するが、

「ヤミーが何処にいるか分からないのに変身してどうすんだ」

にべもなく拒絶されるが諦められない映司は、

「まだ間に合うかもしれないだろ！だから・・・」なおさら無駄だろ
・・・え？」

「そいつら、とつくに『死んでる』ぞ」

「・・・え？・・・だって・・・」

アंकの言葉が理解できずもう一度人の入ったカプセルを見る。

そこには、今にも目を開けそうな雰囲気の間人が色つきの液体に浸かっている。ここから出せばきつと助けられる。そう映司は考えるが、それを見透かすようにアंकは話し出す。

「少し考えれば分かるだろうが。ここは使えなくなったものを『処理』する場所のようだ・・・そんな場所に送られるような奴らが五体無事だと思つか？」

「・・・・・・」

「それにこことは違う場所で同じようなカプセルを見たが全部生命維持するための機材が付いてたがコレには付いてない・・・その時点で手遅れだ」

「・・・そんな・・・」

絶望的な現実には膝を落とし俯いて自分の手を見つめる映司。

「……『また』……届かなかった……」

そう呟く映司を他所にアंकは周りを警戒する。

「（さて、奴らが何したいのかわからんが……いい加減仕掛けてきても良い頃だが……）……!?!」

そして、唐突に現れた『ソレ』にいち早く気づき、

「避ける!このバカ!」

そう叫んで頂垂れる映司を突き飛ばす。

一瞬遅れて映司の居た場所の床を突き破り『何か』が飛び出てきた。

「!?!…なんだこいつは!」

アंकは襲撃者を確認して声を上げる。それに反応し映司もそちらに顔を向けると、

「……フム……完全な不意打ちだと思ったのだがよく対応できたね」

聞いたことのある声が聞こえその姿を確認する。そこには……

流線型につきだした顔と鼻、掌に向けて平たく拡大し鋭い爪のある手、足先が細長く三極に分かれて肥大した足を持つモグラを無理やり人型にしたような『怪人』が居た。

「!?!?こいつ、ヤミー!」

映司はすぐに体制を整えモグラヤミーから距離をとる。そして、

「アंक!メダル!.....アंक?」

変身しようとアंकに呼びかけるが当のアंकの様子がおかしいのに気づき疑問に思う。アंकは、

「.....何だコイツは.....ヤミーの気配と混ざって.....まさか.....」

ブツブツと呟く。

そんな様子にお構いなくモグラ怪人は映司たちに襲い掛かる。

「!?!?.....つく!」

「!?!?.....ちつ!?!?」

とつさに左右に飛んで回避する二人だったがその結果お互いが分断され距離が離れた為容易に変身ができなくなった。

それぞれ近くにあった機材に身を隠し相手の出方を窺う二人。そこに、

「できればあまり抵抗しないで欲しいのだがね。正直今の私は手加減が難しくくてね.....できれば『部品』^{パーツ}に欠損が無いほうが手間がなくて助かるんだが」

モグラヤミーから声が掛かる。その声を聞いた映司は聞き返す。

「・・・ふう、いけないいけない。すまないね、この姿になるとどうも思考の箍が外れやすくていけない・・・さてそういう訳なんだが、大人しく捕まってくれないかね？」

正直先程の様子と落差がありすぎて余計に不気味に感じる映司。そこへ、

「おい！シビエとかいったな。お前どうやってヤミーと融合なんてしてやがんだ？」

アंकがシビエに問いかける。するとシビエは嬉しそうにして話し出す。

「・・・ヤミー？・・・そうか！あのメダルの怪物はヤミーというのか！ははは！今日はなんてラッキーデイだ！貴重な実験体だけじゃなく追い求めた存在の名前まで分かるとは！」

「追い求めた存在だ？」

「そうさ！１年前に私は君の言うヤミーを見たのだよ！」

「！？」

映司達はその言葉に驚く。

アंकを含めたヤミーを生み出すグリッドはつい昨日まで800年もの長きに渡り封印されてきた。にも拘らず封印されている間にヤミーが出現している。

映司は、アंकの話の相違に驚き、アंकはある可能性に気づく。

「俺達が封印されている間にメダルの何枚かが消失している・・・そして俺達の知らないヤミー・・・どうやら奪ったコアでヤミーを再現する方法を生み出したか、あるいは・・・別の『グリード』が生まれてるのか・・・どっちにしる馬鹿げた展開になってきたな・・・どうということだ？」

アंकはさらに情報を得るためシビエに問いかける。

普通ペラペラと秘密を話す悪党などそうでもないものだがシビエの『研究者』としての欲望がヤミー化したことで肥大化しているようだ。『研究者』といっても様々なタイプが存在する。たとえば、ただ研究ができれば良いと思う人や結果ではなく過程に注目し方法を模索する人など様々だ。

その中でもシビエのようなタイプは典型的なものかもしれない。

『世に自分の研究を知らしめたい』それがシビエの本質的欲望だった。故にシビエはさらに話を進める。

「私は数年前までは『人造魔道師』の研究に没頭していたんだよ」

『人造魔道師』

人間に対して外科的な処置・調整を行い強力な魔力・魔法行使力を獲得させる技術で魔法文化全盛期から幾度となく試みられた研究だが成功率の低さと倫理問題なども相まってもはや禁忌とされている技術の1つである。

そこまで説明したシビエは顔を俯かせる。

「だが研究は行き詰まっていた。禁忌などというくだらない縛りを受けて思うように研究できなかつたことも原因だが・・・私の研究目標が人造魔道師の『その先』にあったのが研究を困難にした最大の原因だったんだがね」

「その先？」

映司は疑問を口にする。すると待っていたと言わんばかりにシビエが説明する。

「私が人造魔道師計画に携わった頃には既に研究の一応の完成が確立されていてね、私のやれることといえばその検証実験くらいだった。だが私はそれが不満だった・・そんな時だ実験のために出向いた無人世界で『彼』と会ったのは・・・」

「「「「「」」」」」」

「私達が向かった世界は運の悪いことにテロリストたちの根城だったようでね研究チームは皆捕まった。殺される・・そう思っていた。しかしそこへ『彼』が現れた！」

『彼』の話でとたんに調子を上げて語りだすシビエ。

「『彼』は唐突に現れ襲い掛かったテロリスト達に銀色のメダルを打ち込んだ。すると奴らはあつという間にメダルに覆われ怪物になった。見ただけで分かったよそれらは魔導師などという存在を超えたものだ・・だが『彼』はそれすらも凌駕していた。どうやら怪物になった奴らは意識が残っていたらしくてねそのまま『彼』に襲い掛かった・・それを何処から取り出した槍で一蹴し粉碎した！残っていたのは再起不能になったテロリストどもと姿を怪物に変え佇む『彼』だけだった。元の人間体に戻った彼は粉碎したとき散らばったメダルを回収するとそのまま去っていった。その後救助されてからも『彼』の姿が頭から離れなかった・・あの時散らばったメダルを何枚か回収していた私はそれを調べていた。・・だが、

まったく進展せず絶望していたがある時人造魔道師実験でリンカーコアを調べていたときそれは反応したんだよ！その頃リンカーコアとエネルギー結晶を結びつける実験レポートを見ていた私はそれを元に実験を繰り返すついに『ココ』まで来た！！」

そう言ってヤミーとなった自分を誇らしげに誇示する。

「リンカーコアとメダルの融合は口で言うほど簡単ではない・・・あの被験者はリンカーコアが崩壊し、ある者はヤミーまで成ったもののすぐにメダルに分解して消滅。そんな多くの障害を乗り越え・・・ついに私は辿り着いた！生態データとメダルを結びつけ人を更なる領域へ導くこのメダルを！！」

「「！？」」

シビエは何処からか手に乗るくらいの小さな丸い容器を取り出す。映司達はその中身に気づいて驚愕する。

それは、白い円盤に黒い縁、黒のラインで絵柄を描くメダル・・・

「バカな！コアメダルだと！？」

アंकは声を上げる。

「コアメダル？・・・そうか、コレを君たちはそう呼ぶのか。ならば私もそうしよう」

シビエはコアの入った容器を掲げて叫ぶ。

「このコアメダルを投入することで人は人の域を超えた力を得ることが出来る。このようない！」

そう言っつてシビエが腕を横に振るうと並んでいた調整カプセルが幾つも粉々に砕けた。

「ははははは！見たかね？この力を！未だ『彼』には及ばないが、いずれ辿り着く。更なるコアを造り取り込んでね！」

笑うシビエを見て戦慄を覚える映司。もしさらにシビエが力をつければ取り返しの付かないような気がしたからだ。だが、そんな映司と裏腹にアंकは冷めた目でシビエを見て一つ問いかけた。

「だったら何故お前は手に持つてるそのコアを取り込んでないんだ？」

「……………」

その問いに先程まで興奮していたシビエが黙り込んだ。

「お前の手にしているそれはもう完成しているんだろっ？ならそれも取り込めばさらに進化できるんじゃないのか？…………お前がその『器』ならな……………」

「…………君は中々聡いようだね『腕』君」

アंकの言葉に怒りを覚えたように低い声を出すシビエ。それを見て確信を得たアंकは笑い出す。

「…………アंक、どういうことだよ？」

映司はアंकに問うと笑いながら説明する。

「くくくっ、簡単なことだ要するにこいつのチンケな器じゃメダル一枚が限界なんだよ」

「？」

「コップ一杯にはそれに納まる分の水しか入らない・・それ以上入れても零れるだけだ。コレがコップならいいんだが水風船ならどうなる？」

「・・・そりゃ破裂す・・・！そうか！」

「そうだ。メダルの力を受けるってのは水風船に水を入れるようなもんだ容量を超えれば破裂する『器』ごとだ。恐らくこの場合こいつが言っていたメダルに分解されるってのがその結果なんだろうよ」

アंकの説明で納得する映司だったがそこへ黙り込んでいたシビエが横槍を入れる。

「・・・たしかに、私はここが限界だろう・・・『今』は。。」

「あ？」

「先程も言っただろう？『いずれ辿り着く』と・・・」

普通なら負け惜しみにも聞こえるがシビエの秀囲気にアंकは思案する。そこへ、

「・・・それ・・・今も人造魔道師実験続けていることに関係します？」

今まで聞く側だった映司が質問していた。
これには少々意外だったのかシビエは驚いていたが気を取り直し話し出す。

「・・・そうだよ。器が小さいというのなら大きく作り変えれば良い。その為にも実験を完成させないといけないんだよ・・・だから、協力してくれないかい？」

そういつとシビエは映司たちが隠れている機材に近づいていく。
しかしそれに構わず映司は聞き返す。

「あなたは・・・これからココにいる人達のように酷い事を繰り返すんですか？・・・」

「酷いこと？・・・くだらない倫理観に囚われている者が言いそうな事だね。いいかね映司君。ここにあるものは偉大なる功績の礎だ。
大きな目的の前には小さい犠牲は当たり前のことなんだよ」

シビエはまるで子供を諭すように語る。

「小さい犠牲？」

「ああ。君は今この次元世界がどれほどひろがっているか知っているかい？観測されているだけで3桁以上、人口にいたってはもはや計測不能といってもいいだろう。その内のほんの僅かな犠牲でこの素晴らしい力が完成し全次元世界が新たな革新を迎える、迷うことなどないだろう？・・・なのにといつもこいつも君と同じような事を言ってそれを邪魔する。まったく理解しかねるよ」

吐き捨てるように言いながらさらに近づいてくるシビエ。

だがそれでもそこを動かさず映司は問いかける。

「・・・あなたは、人の命をなんだと思ってるんだ・・・」

何かを堪えるように声を絞り出す映司。

「『命』？・・・この次元世界では幾らでも有るものじゃないか。そんなものに固執するなど臆病な弱者のすることだよ。そんなありふれたものを有効活用している・・・それだけだよ、私は・・・ふん！！」

話し終ると同時に爪で機材を引き裂き爆発させる。

しかしその前に映司は飛び出して事無きを得ていた。そしてそのまま立ち上がりシビエを睨みつける。

そんな映司の様子を楽しむようにシビエは笑う。

「中々元気があるね映司君・・・やはり私が見込んだとおりだよ君は・・・」

そう言って再び離れた映司との距離をゆっくりと詰め始めた。

side アンク

正直楽しくて仕方ないな人間が自分の欲望で沈んでいく様は・・・
800年で文化も、世界すら変わっても結局人間の欲望は何一つ変わらず、むしろ狂気すら感じるほど大きくなっている。

やはり人間は・・・800年前から変わりもせず外側を綺麗事で固

めて醜い欲望を覆い隠し当たり前のように『生きる』こいつらは気に入らない。

目覚めて最初にあつた人間が映司バカだったんでどうかと思つたが……やはり映司が特殊だったんだらう。

……今は余計なことだな……とりあえずこの場をどうするかだな。何とか気を引いて映司を変身させ……

「『命』？……この次元世界では幾らでも有るものじゃないか。そんなものに固執するなど臆病な弱者のすることだよ。そんなありふれたものを有効活用している……それだけだよ、私は……ふん!!」

……今で映司が炙り出されたらしい……だがそんなことはどうだっていい……

「……怒っているのかね？……そうだね、そうやって『命』なんてくだらない柵が人を縛り付ける……何故気づかないんだらう？そんなものに拘るくだらなさに……」

ずいぶんと調子に乗っているようだな……なら、

「目の前の素晴らしい領域に至る事に比べれば何の価値もないのな……ぐが!？」

とりあえずこの不愉快なクズを黙らせるとしよう。

side アンクэнд

シビエが再び調子を上げて話し出したとき、機材の陰からアंकが飛び出しシビエの咄嗟のガードを掻い潜って顔面を殴った。驚いてたたらを踏むシビエ。そのうちにアंकは映司の横に移動する。そして、

「潰せ」

そう言つて映司にメダルを渡す。

「……………」

無言でそれを受け取りドライバーを装着しメダルをセットする。それを見たシビエは、

「…なんだいそれは？デバイス？」

それに答えずオースキャナーでメダルをスキャンし

「変身！」

<タカ！><トラ！><バッタ！>

<TA ・ TO ・ BA！TATOBATA ・ TO ・ BA！
！>

音声とメダルのエフィクトと共に映司はオーズに変身した。

「！？・メダルで変身するだ！？」

C o u n t T h e M e d a l s !
この時、オーズの使えるメダルは・・・

タカ × 2

トラ × 1

バッタ × 1

第6話 モグラと新たな事実と逆鱗（後書き）

とりあえず次回で過去偏終了です
それではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8117u/>

魔法少女リリカルなのはOOO/StrikerS

2011年10月7日00時19分発行